四街道市清水遺跡（３）

―物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ―

平成28年２月

独立行政法人　都市再生機構
公益財団法人　千葉県教育振興財団

四街道市清水遺跡（３）

—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ—

S18 号墳・S19 号墳全景

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第745集として、独立行政法人都市再生機構の物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市清水遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

清水遺跡に関する報告書は３冊目となりますが、既報告と同様に古墳が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年２月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理　事　長　　堀　　田　　弘　　文

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字清水 1445-9 ほかに所在する清水遺跡（遺跡コード 228-006）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は第１章に記載した。

5　本書の執筆は、第１章を主任上席文化財主事　糸川道行・木原高弘、第２～５章を木原高弘が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導・御協力を得た。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構、千葉県産業支援技術研究所、白井久美子氏、沼澤　豊氏

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000 地形図「佐倉」（平成 10 年６月）

第７・８図　独立行政法人都市再生機構による物井地区現況図

8　図版１の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和 44 年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）で、図面の方位はすべてその座標北を示す。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１　調査の経緯と経過……1
　　２　調査整理の方法……5
　第２節　遺跡の位置と環境……6
　　１　遺跡の位置と地形……6
　　２　物井古墳群の概要と周辺の遺跡……7
第２章　縄文時代……16
　第１節　遺構外出土遺物……16
　　１　土器……16
　　２　石器……16
第３章　古墳時代……18
　第１節　古墳……18
　　１　S07 号墳……18
　　２　S13 号墳……22
　　３　S15 号墳……22
　　４　S18 号墳……24
　　５　S19 号墳……31
第４章　中・近世……36
　第１節　溝状遺構……36
　　１　022……36
　　２　023……36
　　３　040……36
　　４　043……36
第５章　まとめ……39
　第１節　各古墳の概要……39
　第２節　物井古墳群の始まりと終焉の時期について……41
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の地形…… 2
第２図　物井地区遺跡分布図…… 3
第３図　清水遺跡年度別調査区域図…… 4
第４図　グリッド設定法…… 5
第５図　周辺の遺跡分布図…… 7
第６図　物井古墳群分布図…… 8
第７図　下層確認グリッド配置・
　　遺物集中地点分布図…… 10
第８図　遺構検出状況全体図…… 11
第９図　遺構分布図（１）…… 14
第10図　遺構分布図（２）…… 15
第11図　縄文時代土器…… 16
第12図　縄文時代石器…… 17
第13図　S07号墳及び出土遺物 …… 19
第14図　S07号墳周溝内土坑２ …… 20
第15図　S07号墳周溝内土坑２出土遺物 …… 21
第16図　S13号墳及び出土遺物 …… 22
第17図　S15号墳及び出土遺物 …… 23
第18図　S18号墳 …… 25
第19図　S18号墳出土石棺材 …… 26
第20図　S18号墳出土遺物 …… 27
第21図　S18号墳主体部及び出土遺物 …… 29
第22図　S18号墳周溝内土坑 …… 30
第23図　S19号墳墳丘図 …… 31
第24図　S19号墳 …… 32
第25図　S19号墳出土遺物 …… 33
第26図　S19号墳周溝外土坑 …… 34
第27図　022・023…… 37
第28図　040・043…… 38

表目次

第１表　縄文時代石器一覧表…… 17
第２表　古墳時代土器・埴輪一覧表…… 35
第３表　臼玉一覧表…… 35
第４表　物井古墳群(清水遺跡内)古墳一覧表… 43

図版目次

巻頭図版　　S18号墳・S19号墳全景
図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　S07号墳周溝南西側、S07号墳周溝南西側、S07号墳周溝南東側、S07号墳周溝内土坑２、S07号墳周溝内土坑２遺物出土状況、S07号墳周溝内土坑２遺物出土状況、S13号墳周溝北西側、S13号墳周溝南西側
図版３　S18号墳・S19号墳遠景、S19号墳全景
図版４　S18号墳改変前周溝、S18号墳改変前周溝・盗掘坑、S18号墳改変前周溝
図版５　S18号墳前方部、S18号墳前方部、S18号墳周溝西側、S18号墳周溝東側遺物・石棺材

出土状況、S18号墳周溝南側遺物出土状況、S18号墳周溝南側須恵器甕出土状況、S18号墳盗掘坑土層断面、S18号墳盗掘坑遺物出土状況
図版６　S18号墳主体部完掘状況、S18号墳主体部木棺埋土検出状況、S18号墳主体部棺床検出状況、S18号墳主体部遺物出土状況、S18号墳主体部遺物出土状況、S18号墳周溝内壁土坑、S18号墳周溝内土坑、S18号墳周溝外壁土坑１
図版７　S18号墳周溝外壁土坑２、S19号墳調査前風景、S19号墳墳丘土層断面、S19号墳墳丘西側土層断面、S19号墳墳丘北側土層断面、S19号墳周溝北側土層断面、S19号墳完掘状況、S19号墳完掘状況
図版８　S19号墳周溝北東側土師器甕出土状況、S19号墳周溝南西側土師器坏出土状況、S19号墳周溝外土坑、S15号墳周溝西側、022西側、022東側、043東側、043西側
図版９　縄文時代土器、縄文時代石器
図版10　古墳時代土器（１）
図版11　古墳時代土器（２）・埴輪、S07号墳周溝内土坑２出土臼玉、S18号墳出土石棺材
図版12　鉄製品
図版13　鉄製品エックス線透過写真

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過（第1～3図）

独立行政法人都市再生機構が実施する千葉県四街道市物井地区土地区画整理事業地内には多くの埋蔵文化財が分布する。その取扱いについては、千葉県教育委員会の指導のもとに、一部の保存地域を除き記録保存の措置が講じられることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団（平成17年以前は財団法人千葉県文化財センター）が昭和59年から調査を実施し、調査成果として平成26年度までに17冊の報告書を刊行している[1]。

記録保存の対象とされたのは、清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡、御山遺跡、小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡、棒山・呼戸遺跡、高堀遺跡、館ノ山遺跡、古屋城跡、北ノ作遺跡、鳴越遺跡、郷遺跡、中久喜遺跡の15遺跡である。

今回報告する清水遺跡は事業地の北西端に位置する。発掘調査は昭和60年度から開始され、平成26年度まで16次にわたって行われた。このうち12次までの成果については、既に刊行された2冊の調査報告書に収められている。

本書に収録したのは、13次から16次までの調査成果である。発掘調査期間、担当者などは以下のとおりである。なお、調査期間の前の括弧数字は調査次数である。

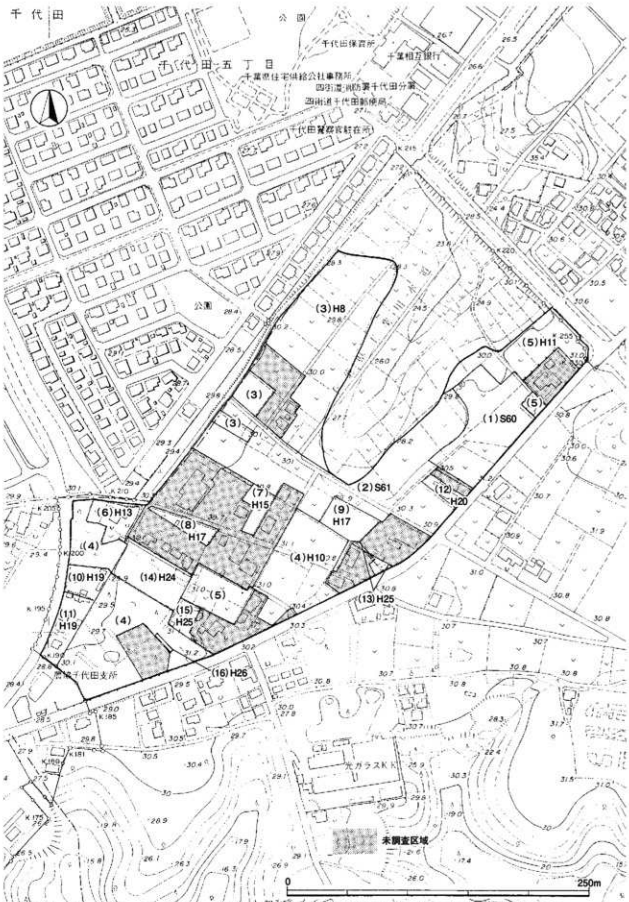
平成24年度　調査研究部長　関口達彦
調査1課長　白井久美子
(13) 調査期間　平成24年7月3日～平成24年8月20日
調査面積　(規模) 172㎡　(確認調査) 上層 172/172㎡・下層 7/172㎡
(本調査) 上層 104㎡・下層 0㎡
調査担当者　糸川道行
(14) 調査期間　平成24年7月9日～平成24年10月19日
調査面積　(規模) 1,774㎡　(確認調査) 上層 244/1,774㎡・下層 48/1,774㎡
(本調査) 上層 1,619㎡・下層 0㎡
調査担当者　糸川道行

平成25年度　調査研究部長　伊藤智樹
整理課長　今泉　潔
(15) 調査期間　平成25年7月19日～平成25年8月9日
調査面積　(規模) 579㎡　(確認調査) 上層 58/579㎡・下層 12/579㎡
(本調査) 上層 521㎡・下層 0㎡
調査担当者　森本和男

平成26年度　調査研究部長　伊藤智樹
整理課長　今泉　潔
(16) 調査期間　平成26年9月22日～平成26年10月16日

第１図　遺跡の位置と周辺の地形（１／25,000）

中之坊遺跡
高塚遺跡
高塚NG-2遺跡
高塚NG-1遺跡
高塚NG-3遺跡
高塚NG-4遺跡
高塚NG-5遺跡
高塚NG-6遺跡
高塚NG-7遺跡
高塚NG-8遺跡
高塚NG-9遺跡
高塚NG-10遺跡
高塚NG-11遺跡
高塚NG-12遺跡
高塚NG-13遺跡
高塚NG-14遺跡
高塚NG-15遺跡
高塚NG-16遺跡
高塚NG-17遺跡
高塚NG-18遺跡
高塚NG-19遺跡
高塚NG-20遺跡
高塚NG-21遺跡
高塚NG-22遺跡
高塚NG-23遺跡
高塚NG-24遺跡
高塚NG-25遺跡
高塚NG-26遺跡
高塚NG-27遺跡
高塚NG-28遺跡
高塚NG-29遺跡
高塚NG-30遺跡
高塚NG-31遺跡
高塚NG-32遺跡
高塚NG-33遺跡
高塚NG-34遺跡
高塚NG-35遺跡
高塚NG-36遺跡
高塚NG-37遺跡
高塚NG-38遺跡
高塚NG-39遺跡
高塚NG-40遺跡
高塚NG-41遺跡
高塚NG-42遺跡



第３図　清水遺跡年度別調査区域図

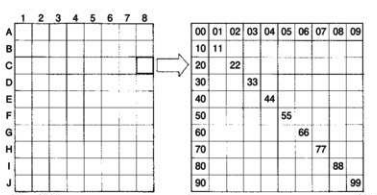
調査面積　（規模）120㎡　（確認調査）上層 120/120㎡・下層 4 /120㎡
（本調査）上層 81㎡・下層 0 ㎡
調査担当者　山岡磨由子

整理作業は平成 25・27 年度に行い、平成 27 年度に報告書を刊行した。
平成 25 年度　調査研究部長　伊藤智樹
整理課長　今泉　潔
整理期間　平成 25 年 7 月 15 日～平成 25 年 8 月 31 日
整理内容　水洗・注記の一部～編集の一部
整理担当者　糸川道行
平成 27 年度　文化財センター長　小久貫隆史
整理課長　岸本雅人
整理期間　平成 27 年 4 月 1 日～平成 27 年 11 月 30 日
整理内容　水洗・注記の一部～報告書印刷・刊行
整理担当者　木原高弘

2　調査・整理の方法（第 4 ・ 7 ・ 8 図）

物井地区では事業範囲全域を公共座標（旧座標‥国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく方眼網で覆って調査を行っている。方眼は 50 m× 50 mの区画を大グリッドとし、名称は包含網の北西角を起点にして、東へ 1 ・ 2…、南へ A ・ B…として、5N のように両者を組み合わせて大グリッドの名称としている。その内部を 100 分割した 5 m× 5 mの区画が小グリッドで、北西隅を 00、南東隅を 99 としている。00 を起点に東へ 01･02…、南へ 10･20…と振っており、大グリッドと組み合わせて 5N-75 のように表記した。遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。(14) 次と (15) 次がほぼ接する位置にある 6O-60 グリッドは旧座標で X=-34,980.000、Y=32,100.000 であるが、世界測地系では X=-34,624.8163、Y=31,806.3820、北緯 35° 41′ 14.63003″、東経 140° 11′ 05.09611″である[2)]。

遺構・遺物の標高は、東京湾平均海面（T. P.）からの海抜高で記録した。



第 4 図　グリッド設定法

各次の調査地点の位置は、(13) 次は遺跡の南東側にあり、北側は (9) 次、西側は (10) 次、南側は出口遺跡にそれぞれ接する。(14) 次は遺跡の西側に位置し、西側は (4) 次に接する。(15) 次は (14) 次の東側に隣接し、北東側に (5) 次が接する。(16) 次は遺跡の南西側に位置し、北東側は (4) 次に接する。

(13) 次は、当初南東側の三角形の 68㎡が調査対象であった。重機を使用して確認調査の表土除去を実施したところ、中央部で産業廃棄物が検出されたことから、安全対策のため一旦調査が中断された。その後、事業者による環境整備が整ったことと事業者の要望により北西側の 104㎡が追加され、合計 172㎡の調査が再開された。上層確認調査の結果、以前に調査・報告された S07 号墳の南側周溝及び、周溝内土坑が検出された。ほかに中・近世の溝状遺構２条が検出され、本調査が行われた。下層については、約２ｍ×２ｍのグリッドを２か所設定して確認調査を実施したが、石器の出土はなかった。

(14) 次の調査地点は、表土の状態で中央からやや西側のところに古墳と思われる若干の高まりが見てとれた。古墳とみられる部分についての上層の確認調査は、周溝の検出を目的としてトレンチを設定した。また以前に調査・報告された SI3 号墳の続きを確認する目的等で、一部に任意のトレンチを設定した。調査の結果、SI3 号墳の一部やかつて物井２号墳と命名され、存在が推定されていた S18 号墳及びその主体部・周溝内土坑、高まりの箇所に新発見の S19 号墳及び周溝外に隣接する土坑が検出されたため、本調査が実施された。

下層については、古墳の調査前後に実施した。その結果、調査区中央南部の 5O-35 グリッドにおいて、Ⅵ層から石器が１点出土したため周囲を拡張して調査を実施したが、石器の出土はなく、本調査は不要と判断された。出土した石器は、整理時の検討により旧石器時代ではなく縄文時代の所産と判断した。撹乱等により混入したものと考えられる。

(15) 次は、上層確認調査の結果、SI3 号墳の周溝の一部と、中・近世の溝状遺構が２条検出され、本調査が実施された。下層は、２ｍ×２ｍのグリッドを１か所設定して確認調査を実施したが、石器の出土はなかった。

(16) 次は、上層確認調査の結果、SI5 号墳の周溝の一部と、中・近世の溝状遺構１条等が検出され、本調査が実施された。下層は、２ｍ×２ｍのグリッドを１か所設定して確認調査を実施したが、石器の出土はなかった。

遺構番号は、発掘調査時には 001 から始まる３桁の数字を付与した。その前に遺構の種別を表す略号を付けたものもある。遺構略号は古墳が SM、土坑・土坑墓が SK、溝状遺構が SD である。

本書では前回の報告と同様、古墳については清水の S を頭文字に冠して S01 ～ S19 号墳の呼称、溝状遺構については全て既報告のものと同一遺構であったので、同じ３桁の遺構番号に振り替えて報告することとした。古墳の新旧の遺構番号については第４表を参照されたい。

遺物の注記は、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号の順で書き込んだ。グリッドをもとに取り上げた出土遺物については、上記の遺構番号がグリッド名に替わる。なお直接書き込むことが好ましくない遺物については、袋またはラベルに記入した。

第２節　遺跡の位置と環境

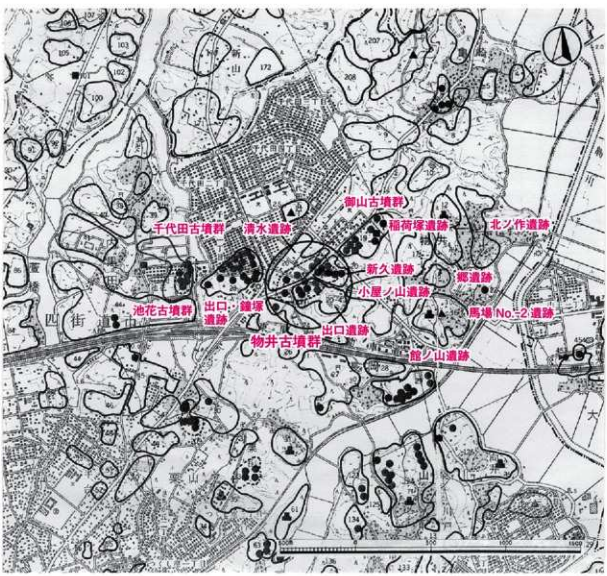
１　遺跡の位置と地形（第１・２図、図版１）

四街道市は、印旛沼に南西側から注ぐ手繰川と鹿島川支流の小名木川の源流部に位置する。市域の北東

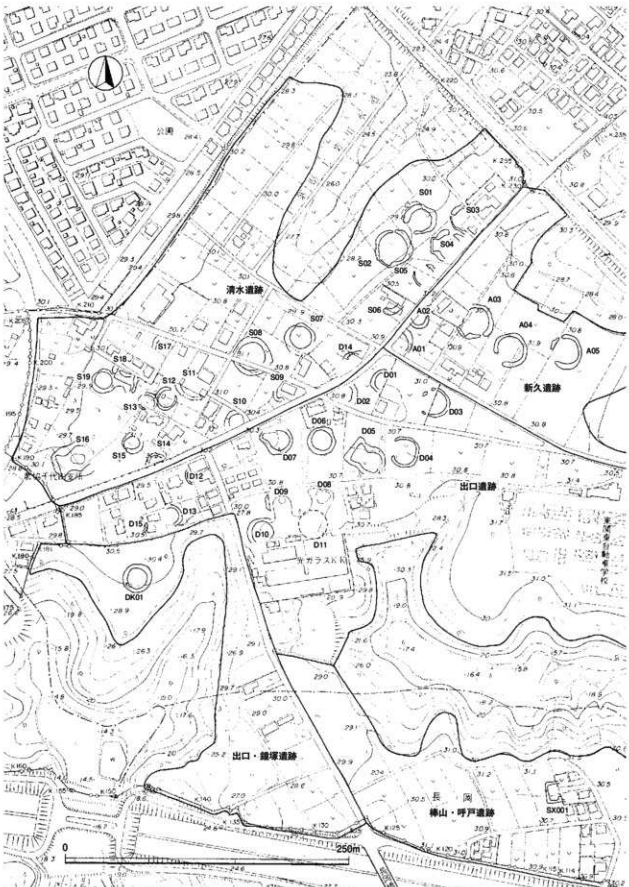
端部に当たる物井地区は、両水系に挟まれており、台地は両水系の小支谷によって浸食され、樹枝状の複雑な地形を示している。清水遺跡は物井地区の北西端に位置する。一続きの台地にあるが、県道（佐倉停車場・千代田線）を挟んで便宜的に分けられた南側の出口遺跡、東側の新久遺跡とともに、鹿島川水系と手繰川水系の分水嶺の奥部に立地する。標高 30 m前後の平坦な台地であるが、北東側には浅い谷頭がみられる。この谷は手繰川に続く谷の最奥部である。

2　物井古墳群の概要と周辺の遺跡（第２・５・６図）

清水遺跡において検出された主な遺構は、古墳時代後期の古墳である。清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡にわたって分布する６世紀から７世紀に営まれた中小規模の前方後円墳、帆立貝式古墳、陸橋部を持つ円墳、単純円墳は物井古墳群として括られている。清水遺跡内で調査された古墳は 19 基で、S01 ～ S17 号墳は報告済である。今回報告するのは既報告の S07・S13・S15 号墳の一部、新規は S18・



第５図　周辺の遺跡分布図
－『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)東葛飾・印旛地区(改訂版)』から改図転載－



第６図　物井古墳群分布図

S19 号墳である。同様に新久遺跡内の古墳については A01 ～ A05 号墳、出口遺跡内の古墳は D01 ～ D14 号墳、出口・鐘塚遺跡内の古墳は DK01 号墳が報告されている。その後、平成 25 年度に出口遺跡において新規の古墳が 1 基調査され、物井古墳群の既調査の古墳は 40 基を数える。

主な埋葬施設は、箱式石棺と木棺の 2 種であり、その多くが墳裾部の地山を掘り込んだ墓坑内に設けられるいわゆる変則的古墳に属し、後から追加されたとみられる周溝内土坑も多数検出されている。また、墳丘の地山内に主体部が検出されない円墳も数基あり、墳丘封土内に主体部が設けられていたと思われる。

副葬品は基本的に直刀、刀子、鉄鏃、玉類の 4 種類である。特殊な遺物としては S08 号墳からは下総型埴輪が出土した。旧印旛郡内では最南部の出土例である。ほかには S11（物井 1）号墳の金銅装円頭把頭大刀、D01 号墳の小札、A04 号墳の馬具などの副葬品がある。

そのほかに、出口遺跡の南端に 3 基、出口・鐘塚遺跡に小規模な方墳が 6 基分布するが、出土土器から 8 世紀後葉以降の方形周溝状遺構と捉えられる。

物井地区及び周辺の古墳時代後期の遺跡の立地傾向を概観すると、古墳群は西側の手繰川東岸の支流と小名木川北岸の支流に挟まれた分水嶺付近に隣接して分布し、集落は東側の鹿島川本流及び小名木川の谷津に近い場所に営まれる。以下、概要・特徴を記しておく。

千代田古墳群は、清水遺跡の東側に空閑地を挟み古墳が分布する。未調査のまま失われた古墳もあり、実数ははっきりしないが 20 基ほどの存在は確実である。発掘調査されたのは 9 基の円墳で、うち 4 基は墳頂部の封土内に木棺、1 基は墳丘裾部に木棺、3 基は墳丘裾部に箱式石棺が検出された。

副葬品は直刀、刀子、鉄鏃、玉類が出土した。墳丘裾部ではなく墳頂部に主体部が設けられる古墳が多いのが特徴である。

御山古墳群は、新久遺跡の北東側に位置する。物井古墳群とは同一の台地上にあるが、間に両側から谷が入り、地形的にやや分離している。円墳 7 基、方墳 4 基が調査された。円墳は南群 3 基と北群 4 基の 2 群に分かれる。主体部は、南群のうち 2 基は裾部に箱式石棺が検出され、北群では石棺が検出されず、1 基は墳頂下の墳丘内に主体部を設けられていた可能性が高い。北群は 6 世紀後半から末にかけて、南群は 6 世紀末から 7 世紀初頭頃に形成されたと想定される。方墳の主体部は、2 基は箱式石棺、1 基は横口式木槨？を墳丘裾の地山内に設けており、変則的古墳の伝統を受け継いでいる。7 世紀中葉から後葉に築かれたものである。そのほかに、一辺約 5 m 以下の小規模方墳が中央付近に 23 基分布するが、8 世紀代の方形周溝状遺構と捉えられている。

副葬品は直刀、刀子、鉄鏃、貝鋼、勾玉、管玉、棗玉、丸玉、臼玉、ガラス玉などが出土している。SX015（円墳）から出土した金銅装円頭太刀は優品として特記されるものである。

池花古墳群は、千代田古墳群の西側に手繰川の源流の谷を隔てて位置する。円墳 13 基（1 基は帆立貝式？）が調査された。主体部は、1 基は横穴式石室、2 基は墳頂部に、2 基は墳丘中央の地山面に木棺・土坑、1 基は、周溝の途切れた部分から木棺が検出された。副葬品は直刀、刀子、鉄鏃、耳環、切子玉、管玉、ガラス玉が出土した。各古墳の築造時期は 6 世紀後半代と考えられている。古墳群の周囲には 8 世紀代の方形周溝状遺構が 13 基検出されている。

小屋ノ内遺跡は、出口遺跡の東側に位置し、遺跡の南側を中心に古墳時代の円墳 6 基、竪穴住居跡 11 軒が検出された。円墳はいずれも主体部がみつかっておらず、墳丘封土内に木棺が設けられていたと思われる。円墳は 6 世紀前半、竪穴住居跡は 6 世紀後葉から 7 世紀の所産である。

第7図　下層確認グリッド配置・遺物集中地点分布図

第 8 図　遺構検出状況全体図

稲荷塚遺跡は、小屋ノ内遺跡の北東側に位置し、円墳２基、竪穴住居跡11軒が調査された。円墳は周溝のみの検出で、築造時期は不明である。竪穴住居跡は７世紀代が主体である。

館ノ山遺跡は、小屋ノ内遺跡と谷を挟んで東側に位置する。古墳時代の竪穴住居跡が72軒調査された。５世紀後葉から７世紀後葉まで連綿と営まれる集落である。上記の古墳群の形成された時期と重なる６世紀中葉から７世紀中葉にかけての軒数が多い。同一台地上の北東側に位置する馬場№-2遺跡にかけて集落が広がっていることは確実である。

郷遺跡は、稲荷塚遺跡の谷を挟んだ北東側に位置する。７世紀前半から中葉の竪穴住居跡が５軒検出された。

北ノ作遺跡は、郷遺跡の北東側、鹿島川本流近くに立地する。７世紀中葉の竪穴住居跡が３軒検出された。

注１　物井地区の既刊の発掘調査報告書は以下のとおりである。

（財）千葉県文化財センター　1994『四街道市卸山遺跡（1）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』

（財）千葉県文化財センター　1999『四街道市出口・鍋塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』

（財）千葉県文化財センター　2005『四街道市小屋ノ内遺跡（1）旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』

（財）千葉県教育振興財団　2006『四街道市小屋ノ内遺跡（2）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』

（財）千葉県教育振興財団　2007『四街道市小屋ノ内遺跡（3）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』

（財）千葉県教育振興財団　2008『四街道市郷遺跡・中久喜遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』

（財）千葉県教育振興財団　2009『四街道市稲荷塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』

（財）千葉県教育振興財団　2009『四街道市清水遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』

（財）千葉県教育振興財団　2011『四街道市館ノ山遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』

（財）千葉県教育振興財団　2011『四街道市新久遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』

（財）千葉県教育振興財団　2011『四街道市清水遺跡・新久遺跡　旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ－』

（財）千葉県教育振興財団　2012『四街道市出口遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』

（公財）千葉県教育振興財団2013『四街道市北ノ作遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』

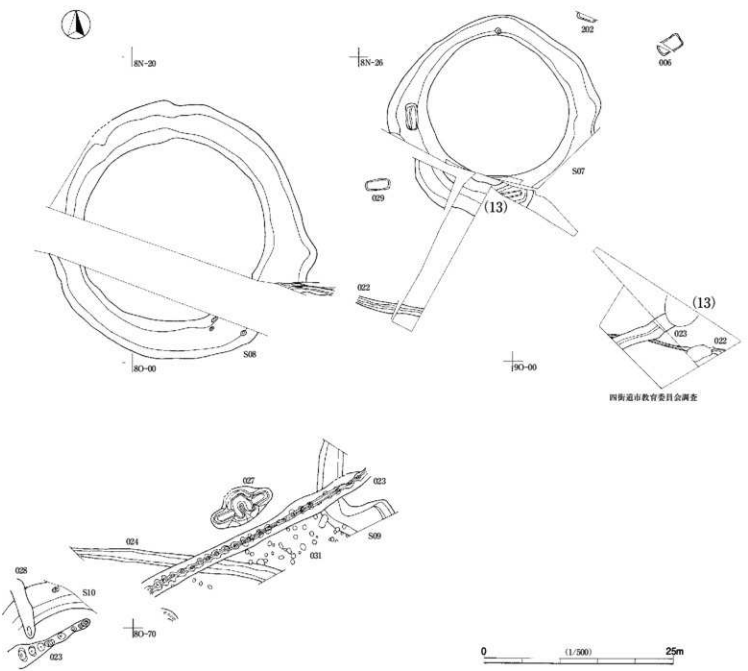
（公財）千葉県教育振興財団2013『四街道市出口遺跡　旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』

（公財）千葉県教育振興財団2013『四街道市館ノ山遺跡（2）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅤ－』

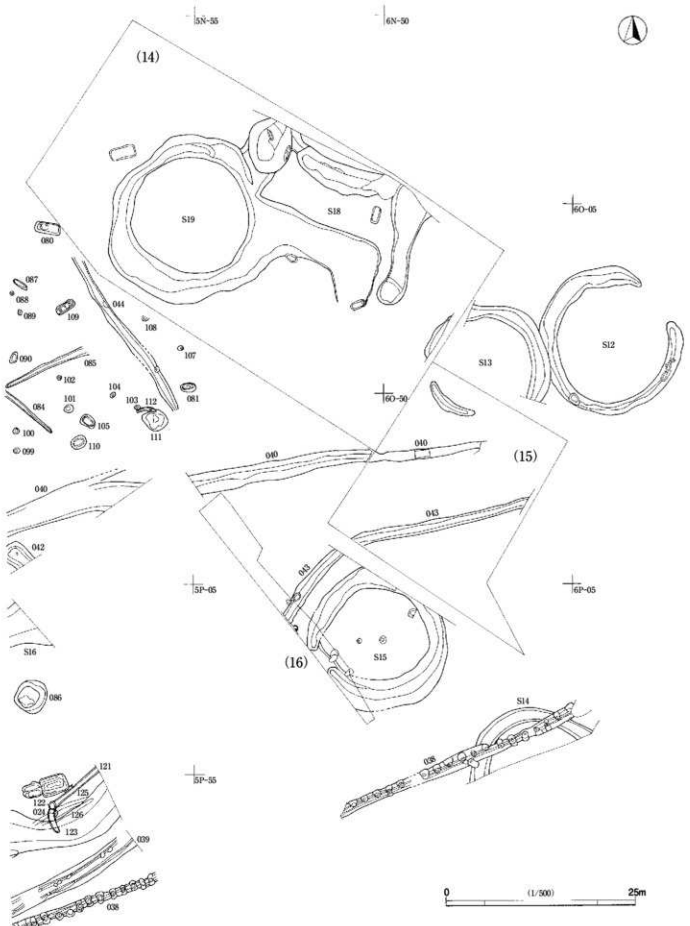
（公財）千葉県教育振興財団2013『四街道市卸山遺跡（2）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ－』

（公財）千葉県教育振興財団2014『四街道市鹿越遺跡（1）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－』

２　変換値はWeb版 TKY2JD　Ver.1.3.80による。


8N-20
8N-26
202
006
S07
029
(13)
022
S08
8O-00
9O-00
(13)
023
022
四街道市教育委員会調査
027
023
S09
024
031
028
S10
8O-70
023
0
(1/500)
25m

第 9図　遺構分布図（1）


5N-55
6N-50
(14)
S19
S18
6O-05
S13
S12
6O-50
(15)
040
043
045
5P-05
6P-05
(16)
S15
S16
086
S14
050
5P-55
121
125
122
021
126
123
039
038
0
(1/500)
25m

第10図　遺構分布図（2）

第２章　縄文時代

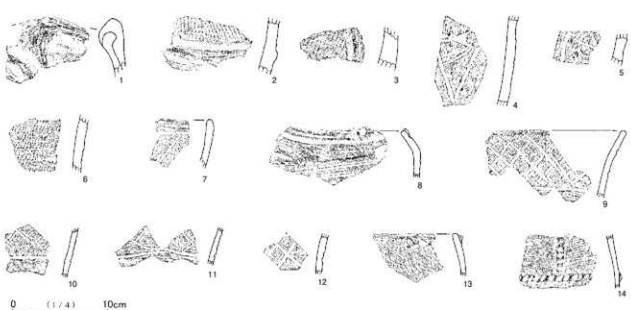
第１節　遺構外出土遺物

(13) 次～ (16) 次調査地点内において縄文時代の遺構は検出されなかったが、古墳周辺および溝内から、中期から後期にかけての縄文土器の破片と石器がわずかに出土した。

1　土器（第 11 図、図版９）

１～３は加曽利Ｅ式土器の深鉢である。１は波状口縁の破片で、口縁部外面にはRL縄文を施し、波頂部より隆線を垂下し枠状文を施す。２・３は同一個体の胴部破片で、外面にRL縄文と隆線脇にナデを施す。

４～ 14 は後期の土器である。４・５は同一個体の堀之内式土器深鉢の胴部破片で、沈線文を施す。６は胴部破片で、LR 縄文と浅い沈線文を施す。７は口縁部破片で、LR 縄文と沈線文を施す。８は波状口縁で、口唇部外面に瘤状突起を貼り付ける。下位に隆線の剥離した部分がみられ、横位に沈線を施す。９～ 12 は同一個体の深鉢の破片で、口縁部外面に格子目状の沈線文を施し、下位を横位の沈線で区画する。同一個体の破片は、(16) 次調査地点の溝状遺構 043 と S15 号墳付近より数点出土した。13・14 は紐線文を施す深鉢形土器で、13 は外面に RL 縄文を施す口縁部である。14 の胴部片は縦位および横位に紐線文を貼り付け、区画内に弧状の条線文を施す。８～ 13 は加曽利Ｂ式土器、14 は安行式土器である。

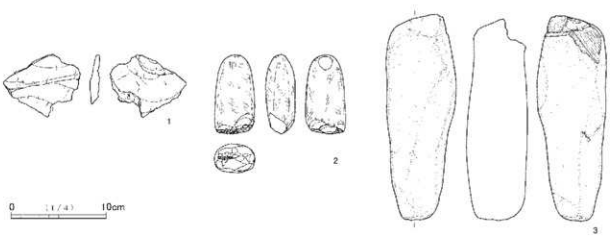


第 11 図　縄文時代土器

2　石器（第 12 図、図版９）

１は安山岩製の剥片である。(14) 次地点の下層確認調査時に、中央南側の 50-35 グリッドから出土したもので、縄文時代の所産と判断した。撹乱等により混入したものと考えられる。２は砂岩製の敲石で、

磨製石斧から転用されたものである。全体に被熱痕が認められ、火熱のため部分的に剥落している。3は砂岩製の敲石である。



第 12 図　縄文時代石器

第 1 表　縄文時代石器一覧表

地区	出土地点	挿図番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
(14)	SO-35	第 12 図 1	剥片	安山岩	8.1	6.7	1.1	46.4	
(14)	S18	第 12 図 2	敲石	砂岩	8.45	4.2	3.1	183.4	磨製石斧→敲石、全体に被熱痕あり。
(14)	S19	第 12 図 3	敲石	砂岩	21.8	7.4	6.5	1480.0	

第３章　古墳時代

第１節　古墳

清水遺跡内で調査された古墳は19基で、そのうち（１）次～（12）次において検出されたS01～S17号墳は既報告である。今回の（13）次～（16）次の調査地点において検出された古墳は５基で、S07・S13・S15は既報告の古墳の一部、S18（物井２）号墳・S19号墳は新規に報告する古墳である。

１　S07号墳

墳丘と周溝（第13図、図版２）

北側及び南東側は（４）次・（９）次で、既に報告済みであり、（13）次において南側1/4弱を検出した。円墳で、南東側の周溝外周壁は未調査である。

墳丘は完全に失われており、平面規模は周溝内壁の上端で直径17.5ｍ～18.5ｍ、下端で直径20ｍ～21ｍを測る。内壁上端の輪郭線は多少いびつな円形で、やや北側が尖る「おむすび形」となる。周溝の幅は２ｍ～６ｍで、おおむね北半は遺存状態が悪く、深さは約0.2ｍ～0.5ｍである。南側は深く0.75ｍ～1.20ｍを測る。南側周溝内壁上端から深さ約0.6ｍに、長さ約11.0ｍ、幅約1.4ｍのテラス状の段を有し、対する外壁も約1.0ｍ外側に張り出す。

墳丘内に主体部は確認されておらず、墳丘封土内に木棺が設置されていた可能性が高い。周溝内土坑は、西側に既報告の１基、南側に今回報告の１基が検出されている。

周溝内出土遺物（第13図、図版10～13）

土器・鉄製品が少量出土した。１は須恵器蓋である。周溝底面の10cm～20cmほど上から破片が細かく散らばった状態で出土した。全体の2/3ほどの破片で、天井部から口縁部にかけてなだらかに移行し、境界は明瞭でない。天井部の上から約1/3は回転ヘラケズリが施される。外面に自然釉が掛かる。２・３は土師器壺の口縁部破片である。出土位置は不明である。口縁部は折り返しで、２は口唇部に部分的な刻みが施される。４は円筒埴輪の体部破片で、幅１㎜前後の刷毛目が施される。下端にはヨコナデが認められ、さらに下方に突帯が付されるとみられる。内面は縦方向のナデが施される。にぶい橙色を呈する。西側に位置するS08号墳から流入したものであろう。

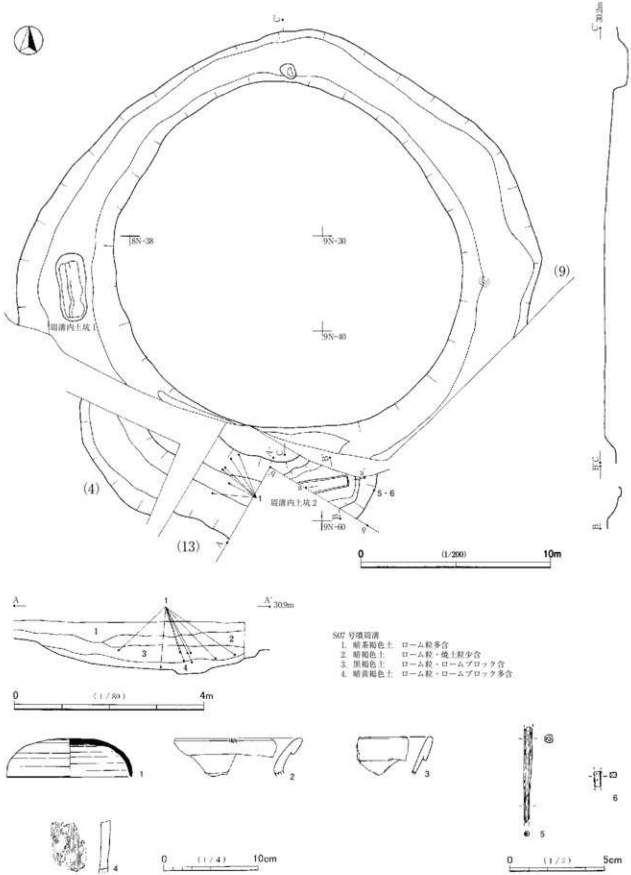
５・６は鉄鏃の茎片である。５は矢柄の木質が遺存している。断面形はいびつな方形である。幅1.1㎜～2.5㎜を測る。６の断面形は長方形で、幅3.0㎜～3.5㎜を測る。

周溝内土坑２（旧遺構番号002）（第14図、図版２）

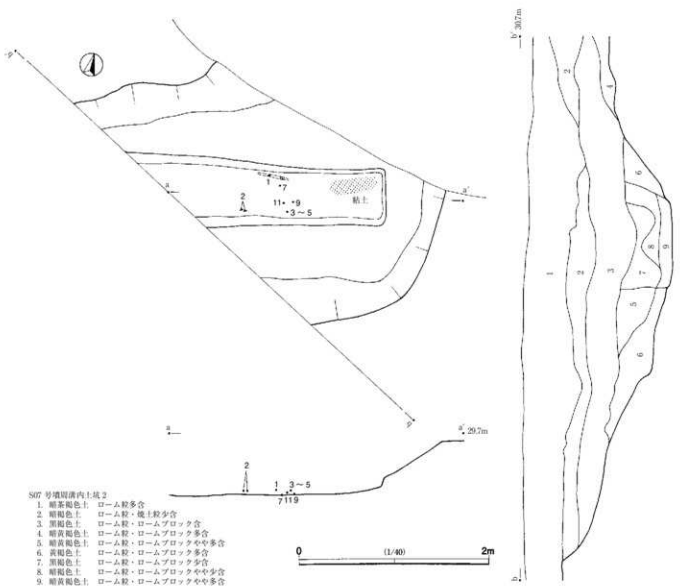
周溝底面に墓坑を掘り込み、木棺を安置したものである。南東側の約2/3を検出した。墓坑は隅丸長方形で、西側の周溝内土坑１より規模が大きく、しっかりとした掘り込みである。主軸はN-76°-Eを指す。主軸長4.0ｍ以上、幅2.8ｍ以上を測る。側壁の傾斜は緩やかである。

木棺は、墓坑底面ほぼ中央に深さ５cm前後の長方形の痕跡がみられた。木棺の寸法は、長さ2.8ｍ以上、幅0.6ｍ～0.75ｍ、高さ約0.55ｍと推測される。内部の東側の小口付近には粘土の散布がみられた。

木棺を安置した後に周囲を埋めている。埋土は多量のローム粒・ロームブロックを含むことから、墓坑を掘った排土で埋め戻したものと思われる。



第 13 図　S07 号墳及び出土遺物



第 14 図　S07 号墳周溝内土坑 2

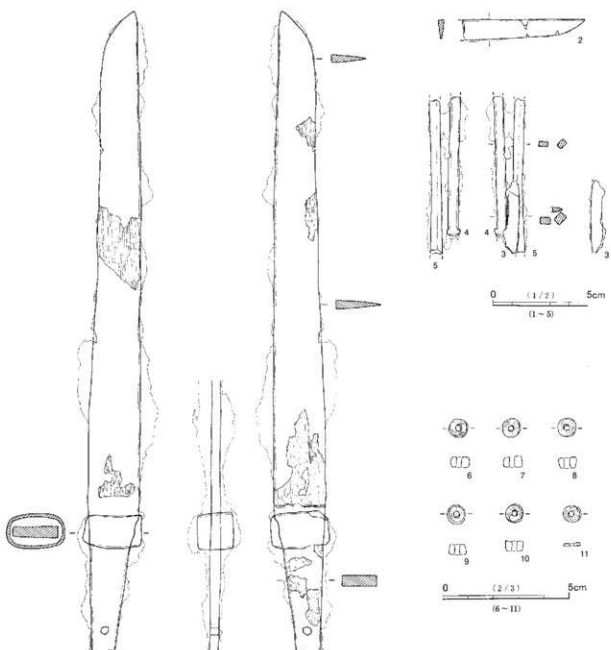
周溝内土坑 2 出土遺物（第 15 図、図版 11 ～ 13）

副葬品は、鉄製品・臼玉が木棺の中央東側の底面直上から比較的集中して出土した。副葬品の出土位置、粘土の散布状況から、遺骸は単体で、頭部を東側に向けて埋葬されたと判断される。滑石製臼玉（6 ～ 11）は胸部付近、鉄刀（1）は鋒を下、刃を内側にして胸から腹部の右側に置き、鉄鏃（3 ～ 5）は胸の左側、刀子（2）は腹部から腰部にかけての左側に置かれたものと思われる。

1 の鉄刀は、北側の側板下から鋒を西側に、刃側を棺の内側に向けて出土した。現存長 34.1cm、身部長 26.3cm、身幅 2.7cm、厚さは最大 5.5mm を測る。関は背側にのみ有し、撫角で二段に切れこむ。茎胴部は茎尻に向かってやや幅を狭める。茎尻は欠損し、形状は不明である。目釘穴は 1 か所みられる。径 4 mm ～ 5 mm を測る。鍔はほぼ完存し、長径 3.15cm、短径 1.85cm、幅 2 cm、厚さ 2 mm 前後を測る。刀身、茎には部分的に木質が付着しており、身の片側には鞘の入り口部である鯉口が遺存する。鍔は装着されていなかった。2 は南側の側面下の西側から出土した刀子の身の破片で、2 点が接合したものである。現存長 6.5cm、最

大幅 1.1cmを測る。3～5は東側の側面下から錆び付いた状態で出土した長頸鏃である。3は片刃箭鏃の鏃身部、4・5は頸部である。3は現存長 3.85cmである。4・5は、断面形は長方形である。4は頸部関に棘状の突起を有する。現存長 7.32cm、幅 2.8mm～3.5mm、関部の幅7mmを測る。5は現存長 8.3cm、幅 3.1mm～4.3mmを測る。

臼玉は6点出土した。石材は軟質の滑石で、灰白色を呈する。径 6.8mm～7.5mm、孔径 1.8mm～2.1mm、重量 0.15g～0.47gで、高さが約4mmのもの5点（6～10）と、1.5mmの薄いもの1点（11）の2種類がある。さらに前者は、断面形が弱い算盤玉状のもの6・8、台形状のもの7、9～10に分けられる。いずれも上下面は平滑でなく凹凸がある。



第 15 図　S07 号墳周溝内土坑 2 出土遺物

2　S13 号墳

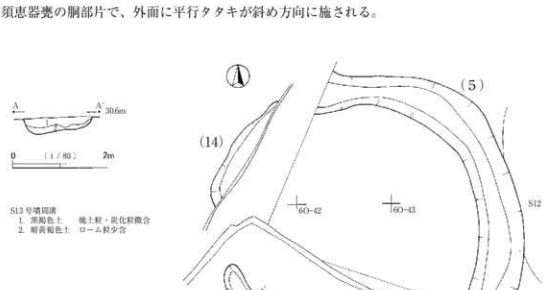
墳丘と周溝（第 16 図、図版 2）

中央から北東側は（5）次に調査され、既報告である。北西側は（14）次、南西側は（15）次で調査された。周溝は円形に廻り、西側及び南側部分が途切れ、陸橋状となる。途切れた部分の周溝先端の平面形は先細りである。東側は S12 号墳と重複する。墳丘は遺存せず、規模は周溝内周壁の上端で 12.5 m、下端で 13.1 mを測る。周溝は幅 1.0 m～ 2.5 m、深さ 0.2 m～ 0.5 mを測る。

主体部は検出されなかった。墳丘の高い位置にあった可能性が高い。

周溝内出土遺物（第 16 図、図版 11）

1は須恵器甕の胴部片で、外面に平行タタキが斜め方向に施される。



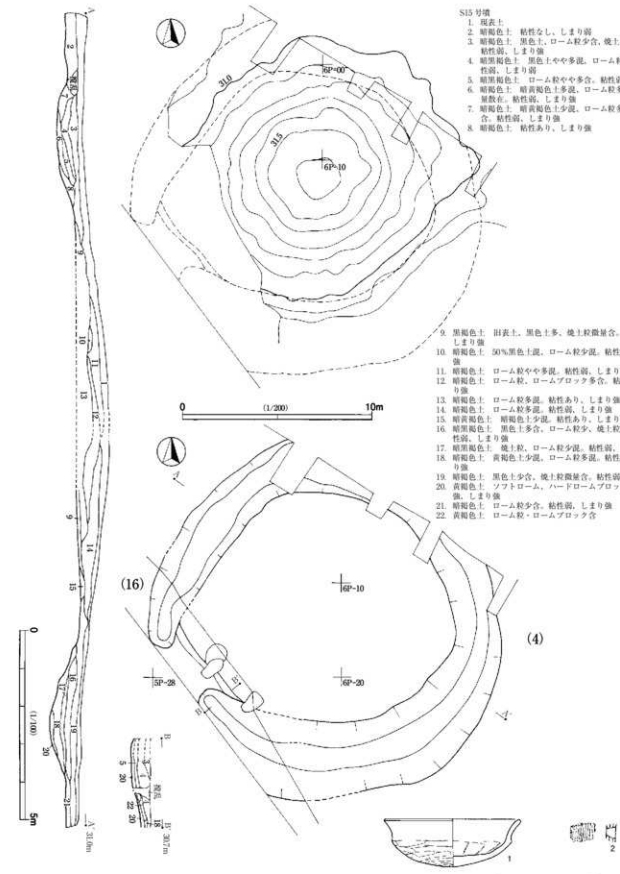
第 16 図　S13 号墳及び出土遺物

3　S15 号墳

墳丘と周溝（第 17 図、図版 8）

南西側が（16）次で調査された。北東側は既報告の（4）次で調査され、直径 15 m、高さ 0.8 mほどの円形の高まりが認められた。墳丘の封土は、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が旧表土上に遺存していた。

周溝は南西側で途切れ、陸橋が形成されることが今回の調査で明らかとなった。周溝の両端の平面形は先細りである。途切れた周溝間は、周溝内壁上端間を結ぶように地山を 10cmほど掘り下げた段が形成されており、墳丘裾部と捉えられる。このことにより陸橋部分には墳丘が及んでおらず、帆立貝式古墳のよ



第 17 図　S15 号墳及び出土遺物

うに突出部をもつ墳形ではなかったと理解される。北東側と南西側の外壁は調査区外に及んでおり、未調査である。

全体の規模は周溝内壁の上端で 12 m～ 14 m、下端で 14 m～ 15.6 mである。周溝の幅は、南西側の幅が広く、2.5 m～ 4.3 mである。陸橋付近は 1.3 mである。周溝の深さは 0.4 m～ 0.6 mである。

主体部は検出されなかった。墳丘の高い位置にあった可能性が高い。

周溝内出土遺物（第 17 図、図版 10・11）

土器、埴輪の破片が少量出土した。1 は土師器坏である。北西側の周溝の底面から約 36cm浮いた状態で出土した。体部は半球形の丸底で、口縁部との境界は突出し、口縁部は外反しながら開く。体部外面はヘラケズリ後丁寧なナデ、内面はヘラナデが施される。2 は埴輪の小破片である。幅 1.5mmほどの中太刷毛目が施される。左側は縦方向のナデが加えられる。形象埴輪の破片と思われる。

4　S18 号墳（旧遺構番号 SM002）

墳丘と周溝（第 18 図、巻頭図版、図版 3～ 5）

前回の報告において所在が推定された「物井 2 号墳」に該当する古墳である。S11（物井 1）号墳が最初に調査された昭和 56 年には墳丘を視認できたはずであるが、現況は南側の調査地点はほぼ平らな土地で、北側も家屋が建ち墳丘は失われていた。

円形の周溝の南西側に突出部が付いており、周溝は人為的に埋め戻されていた。当初は円墳として築造されたが、張り出し部を付加して前方後円墳に改変されたものである。

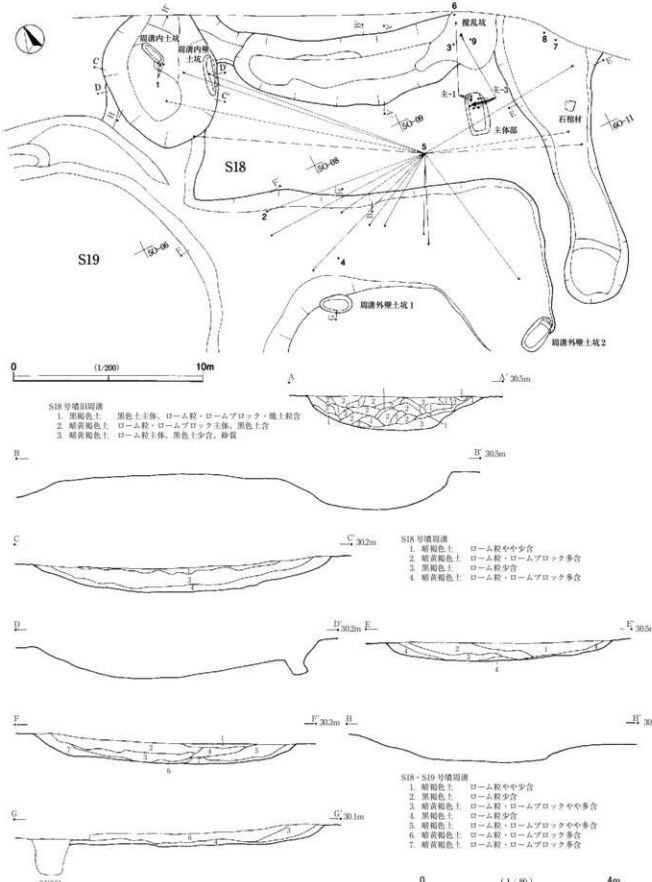
改変前の周溝は、全体の 1/4 弱とみられ、幅 1.8 m～ 3.8 m、深さ 0.5 m～ 0.8 mで、西側が浅く陸橋状となる。周溝内壁の直径は上端で推定約 25 mを測る。付加された前方部の長さは、円形の周溝内壁上端から前方部の周溝内壁上端間で 8.5 m、同下端間で 9.0 mを測り、前方後円墳に改変後の全長は約 33.5 mと推測され、物井古墳群で最大の前方後円墳 S16 号墳と同等規模とみられる。

前方部の周溝は、南東隅角部で途切れ陸橋状となる。陸橋の西側の周溝は南側に突出する。南西側の隅付近は S19 号墳と周溝を共有する。周溝上端の幅は 2.5 m～ 5.5 m、深さ 0.4 m～ 0.7 mで一定しない。東側の周溝内壁付近はやや深いが、それ以外は概して浅く平面形は不整である。西側くびれ部付近は約 0.5 m深くなっている。周溝南西側の土層断面（F－F'）は、一見 S19 号墳の周溝が S18 号墳の周溝を切っているように見えるが、2 層と 4 層は同一層とみられ、互いに切り合っていないと思われる。S18 号墳の改変時に S19 号墳が存在し、周溝が埋まりきっていなかったため、S19 号墳を損壊することなく周溝を共有させたものと考えられる。

東端の旧円墳の周溝にかかる約 3 m四方の範囲の掘り込み（旧遺構番号 001）は、底面の凹凸が顕著で、深さ最大 85cmを測る。覆土に大粒径のハードロームブロックを多量に含む。底面に石棺材が抜き取られた痕跡や裏込め土が認められなかったため、盗掘された墓坑ではなく撹乱坑と判断される。覆土中から鉄鏃、須恵器などの古墳時代遺物、2 m南東側の周溝内からは鞍金具、石棺材が出土しており、隣接する北側の調査区外に盗掘された箱式石棺が位置している可能性が高い。

石棺材（第 19 図、図版 5・11）

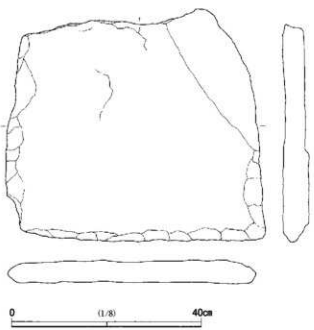
周溝東側から出土した石棺材は、雲母片岩製で周溝底面から約 6 cm浮いた状態で出土した。最大幅 55cm、長さ 49cm、厚さ 5.5cm、重量約 24kg を測る。各側縁にはウロコ状の剥離痕が認められ、間接的な打撃に


S18
S19
周溝内土坑
周溝内埋土坑
攪乱坑
主体部
石棺材
周溝外壁土坑1
周溝外壁土坑2
SK001
0
(1/200)
10m
A
A'
30.5m
B
B'
30.5m
C
C'
30.2m
D
D'
30.2m
E
E'
30.5m
F
F'
30.3m
H
H'
30.0m
G
G'
30.1m
S18号墳周溝
1. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒・ロームブロック・焼土粒含
2. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック主体、黒色土含
3. 暗黄褐色土　ローム粒主体、黒色土少含、砂質
S18号墳周溝
1. 暗褐色土　ローム粒やや少含
2. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
3. 黒褐色土　ローム粒少含
4. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
S18・S19号墳周溝
1. 暗褐色土　ローム粒やや少含
2. 黒褐色土　ローム粒少含
3. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多含
4. 黒褐色土　ローム粒少含
5. 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多含
6. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
7. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
0
(1/80)
4m

第18図　S18号墳

よる調整が施されたと考えられる。特に図示した下端部は、直線的で丁寧な調整が施されている。

これまで物井古墳群で調査された石棺材と比較すると、天井石・側石・小口石は厚さ10cm以上を測るものが多く、清水遺跡 S12 号墳、出口遺跡 D03 号墳の石棺の床石材の寸法に近い。



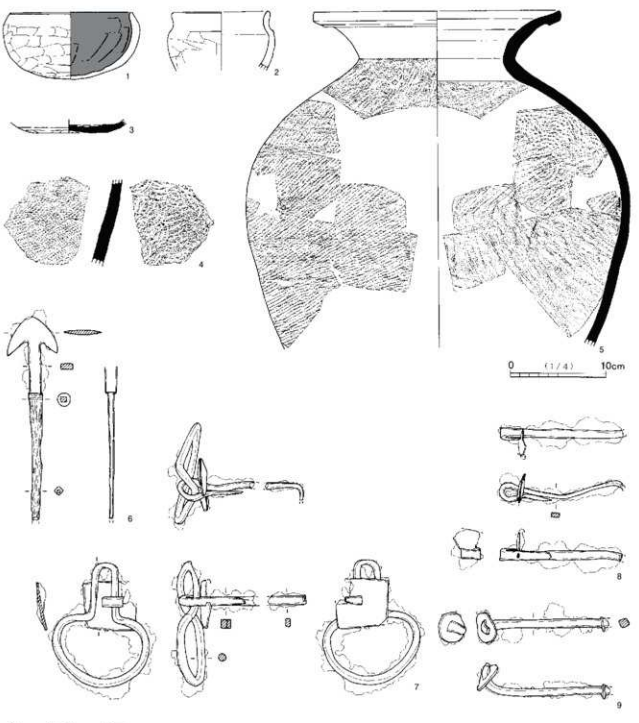
第 19 図　S18 号墳出土石棺材

墳丘・周溝内出土遺物（第 20 図、図版 10 ～ 13）

周溝、撹乱坑を中心に土器が約 40 点、鉄製品が 5 点出土した。1 は土師器椀である。北西側の周溝内の底面から約 14cm浮いた状態で出土した。口縁部は内傾し、口唇部は直立する。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ及び黒色処理が施される。2 は土師器鉢である。南側の周溝内から出土した。口縁部は直立しながら立ち上がり、やや外反しながら開く。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。3 は須恵器坏の平底の底部付近の破片である。撹乱坑から出土した。底部外面中央は上げ底状で、回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリが施される。胎土中に雲母・長石・石英を含む。茨城県南部の新治窯産である。4 は須恵器甕の胴部破片である。南側の周溝内から出土した。外面は格子状タタキが斜め方向に施された後、粗いヘラナデが加えられる。内面は同心円状の当て具痕があり、部分的にナデが施される。5 は大型の須恵器甕である。広範囲にわたって細かく破砕されたような状況で出土した。周溝底面からは約 20cm浮いていた。図示しなかったが丸底の底部付近の破片も出土している。口縁部は折り返し状で、胴部は平行タタキが斜め方向に施された後、粗い回転カキ目が下方を除いて施される。内面は、胴部上方は同心円状の当て具痕が残り、部分的にナデ、下方はヘラナデが施される。胎土は緻密で堅致に焼きあがっており、鉄分と思われる黒色粒子の混入がみられる。口縁部から肩部には自然釉が掛かる。静岡県西部の湖西窯産である。

6 は平根系の鉄鏃で、撹乱坑から出土した。現存長 10.7cm、最大幅 2.7cmを測る。鏃身は三角形を呈し、刃部はふくら、鏃身関部両側には逆刺をもつ。断面は薄く膨らむ両丸造りである。頸部は断面長方形で、

関は直角である。長さ2.65㎝、幅6.5㎜～7.5㎜、厚さ0.3㎜を測る。茎は断面方形で、幅は上端3㎜、下端約1.5㎜である。矢柄の木質が遺存する。関部付近には横方向に細い糸状の繊維質で幾重か巻きつけられ、矢柄が固定されている。7・8は鞍の鞍橋の左右に付けて胸繋・尻繋を結びつける鞍金具である。東側の周溝のほぼ底面上の近接した位置から出土した。7は別造りの輪金、座金具、脚が組み合わされたものである。輪金は剥金をもたない左右に円形に張り出す壺形で、全体の長さ6.6㎝、最大幅5.1㎝、直線部の長



第20図　S18号墳出土遺物

さ 2.8cm、幅 1.5cm、断面径は 2.5mm～ 5.2mmの円形である。輪金を側面及び上・下から見ると、片側が捩じれている。使用時に力が加わったことによるものかもしれない。鞍の居木に固定する脚は幅約 5mm、厚さ 2mm～ 3.5mmの断面長方形の板状の鉄棒で、ヘアピン状に折り曲げて成形された端環が輪金の直線部にからめられる。端環部分は外径 11.5mm、内径 6 mmを測る。脚は途中欠損するが、先端は直角に折り曲げられる。片側は短く不均等である。脚の端環部分の付け根には四角形の板状の座金具が嵌め込まれる。座金具は一辺約 2.3cm～ 2.7cm、現状は錆により膨らんでいるが、元の厚さは 1.5mmほどである。 8 は脚及び座金具の部分で、輪金は欠失する。 7 の約 0.7 m北西側から出土した。 7 と形態が同じで、対になるものと思われる。脚の先端は折り曲げられた部分から先が欠損している。中央付近は「く」字状に弱く屈折している。現存長 6.5cm、幅約 5 mm、厚さ 2 mmを測る。ヘアピン状に成形された端環部分は、外径 10.5mm、内径 5.5mmを測る。付け根に厚さ約 1.5mmの板状の座金具がはめ込まれる。破損が著しく、遺存するのは正面から見て左側の端辺付近のみである。 7 と同様に四角形であったと思われる。 9 は撹乱坑から出土した用途不明の鉄製品である。太さ約 1.5mm～ 6.0mmの断面方形の鉄棒の一方を約 90°折り曲げて、車輪状の鉄板を通したものである。鉄板は長軸径 1.9cm、短軸径 1.7cm、厚さ約 1 mmの楕円形を呈する。鉄棒のもう一方の端部付近にも厚さ約 1 mmの鉄板を嵌め込んだ痕跡が認められる。鉄板間は 6.2cmを測る。馬具の留金具の一部であろうか。

主体部（旧遺構番号 002）（第 21 図、図版 6 ）

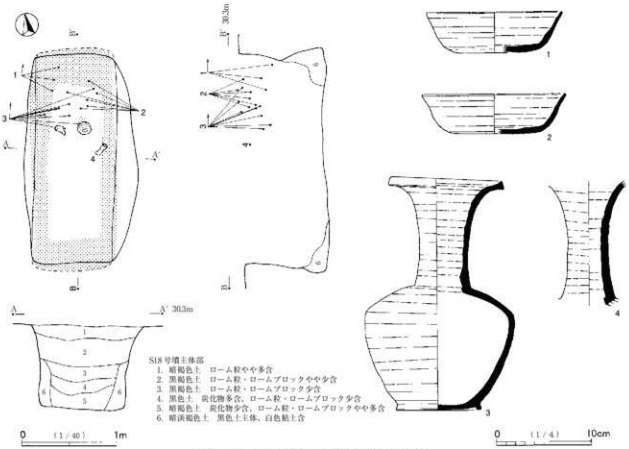
前方部の東側に主体部が営まれる。調査区外に存在すると思われる箱式石棺が当初の主体部で、副次的なものとみてよいと思われる。墓坑は長方形で、壁はおおむね垂直に立ち上がる。主軸は N-17° -E、墳丘の中軸線に対して 5° 強西側に振れる。開口部は長軸 2.2 m、短軸 1.2 m、底面付近の長軸方向はオーバーハングし、長軸 2.37 m、短軸 0.85 m、深さ 0.9 mを測る。側面側には黒色土を主とする裏込土が充填されており、やや多量の白色粘土や少量のローム土を含む。白色粘土は下部に顕著である。内側に木棺が安置されたとみられる。木棺痕は、最大で長さ 1.66 m、幅 0.6 m、高さ 0.5 mを測る。

主体部出土遺物（第 21 図、図版 10）

1 ～ 4 の須恵器は、覆土中層の 2 層から出土した。木棺上に供献されたものと思われる。 3 は高台付の長頸壺で、頸部と胴部が接合箇所で分離し、口縁部の破片は北側の撹乱坑から出土した。頸部が長く、胴部は肩に稜を有するのが特徴である。底部は高台より下方に若干突出する。口縁部の断面形は矩形である。体部外面は回転ヘラケズリ後、全体にヨコナデが施される。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラケズリが施される。灰色及び灰オリーブ色を呈し、自然釉が薄く掛かる。頸部より胴部の方が軟質な焼き上がりである。 4 は口縁部を欠く頸部で、 3 より細い作りである。胎土中に鉄分と思われる黒色粒子を混入する。外面の約 1/3、内面の約 1/2 に濃緑色の自然釉が掛かる。 3 ・ 4 とも湖西窯産である。 1 ・ 2 は須恵器坏である。 1 は北側の撹乱坑から出土した破片と接合した。口径・底径が大きく盤状である。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。口縁部内面に凹線を有するのが特徴である。いずれも胎土中に雲母・長石・石英を含む。新治窯産である。

土坑（第 22 図、図版 6 ・ 7 ）

周溝内に設置された土坑は、西側のくびれ部付近に 2 基、前方部の南側の周溝外壁上端付近に 1 基、周溝西側の突出部に 1 基が位置する。周溝内土坑以外は周溝側壁を切り込むように営まれており、前方後円墳に改変後に営まれた副次的な埋葬施設と思われる。



第 21 図　S18 号墳主体部及び出土遺物

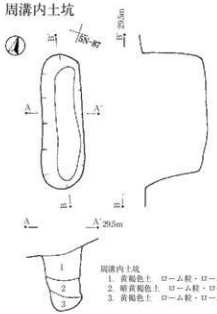
周溝内土坑（旧遺構番号 005）は、西側のくびれ部付近の周溝底面に位置する。細長い溝状を呈し、長さ 1.32 m、幅 0.47 m、深さ 0.65 m を測る。東側壁は下方がわずかにオーバーハングする。覆土はローム粒・ロームブロックが主体であり、人為的な埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

周溝内壁土坑（旧遺構番号 003）は、西側くびれ部付近で周溝内壁を切り込み、オーバーハングしている。細長い溝状を呈し、底面は比較的平坦である。開口部の長軸長 2.18 m、短軸長 0.54 m、深さは周溝底面から 0.35 m、周溝内壁上端から 0.74 m を測る。覆土は多量のロームブロックが混入し、人為的な埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

周溝外壁土坑 1（旧遺構番号 SK001）は、南側の周溝外壁を切り込んで営まれている。主軸は墳丘中軸線にほぼ直交する。長楕円形を呈し、底面は比較的平坦である。開口部の長軸長 1.75 m、短軸長 0.9 m、深さは周溝底面から 0.63 m、周溝外壁上端から 0.74 m を測る。覆土はローム粒・ロームブロックが主体で、人為的な埋土と思われる。遺物は縄文時代中期の土器が出土した。

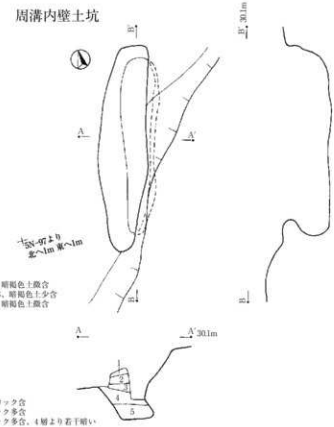
周溝外壁土坑 2（旧遺構番号 SK002）は、前方部南東側周溝の張り出し部分の側壁に切り込んで営まれている。不整な隅丸長方形を呈する。南東側小口の壁面は凹凸があるがそれ以外は平滑である。規模は、開口部の長軸長 2.05 m、短軸長 1.09 m、深さ 0.58 m を測る。覆土はローム粒・ロームブロックが主体であり、人為的な埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

周溝内土坑



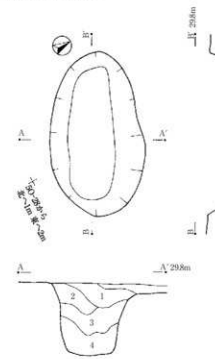
周溝内土坑
1. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック主体、暗褐色土微含
2. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック主体、暗褐色土少含
3. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック主体、暗褐色土微含

周溝内壁土坑



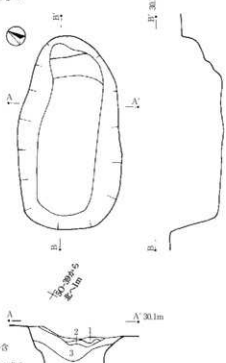
周溝内壁土坑
1. 暗褐色土　ローム粒やや少含
2. 黒褐色土　ローム粒少含
3. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック含
4. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
5. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含、4層より若干暗い

周溝外壁土坑1



周溝外壁土坑1
1. 黒褐色土　ローム粒少含
2. 暗褐色土　ローム粒少含
3. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
4. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック主体、暗褐色土少含

周溝外壁土坑2



周溝外壁土坑2
1. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含
2. 黒褐色土　ローム粒少含、黒み強い
3. 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多含
4. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多含

0　〔1/60〕　1m

第22図　S18号墳周溝内土坑

5　S19 号墳（旧遺構番号 SM001）

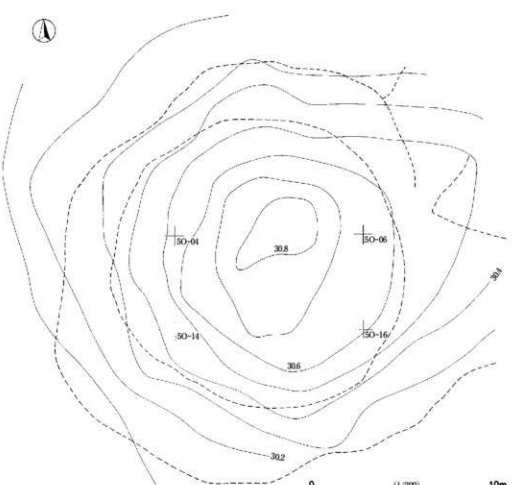
墳丘と周溝（第 23・24 図、巻頭図版、図版 3・7・8）

S18 号墳の南西側に近接して位置する円墳である。直径 22 m、高さ 0.6 mほどの円形の高まりが認められ、トレンチを設定し確認したところ、円形に廻る周溝が検出された。墳丘は、ローム粒・ロームブロックと黒褐色土をそれぞれ主体とする層を交互に積み上げた盛土が高さ 30cmほど残っていた。墳丘内の主体部及び周溝内土坑は検出されなかった。約 1.4 m北西側の周溝外に、本墳との関係が想定される土坑（旧遺構番号 SK003）が位置する。

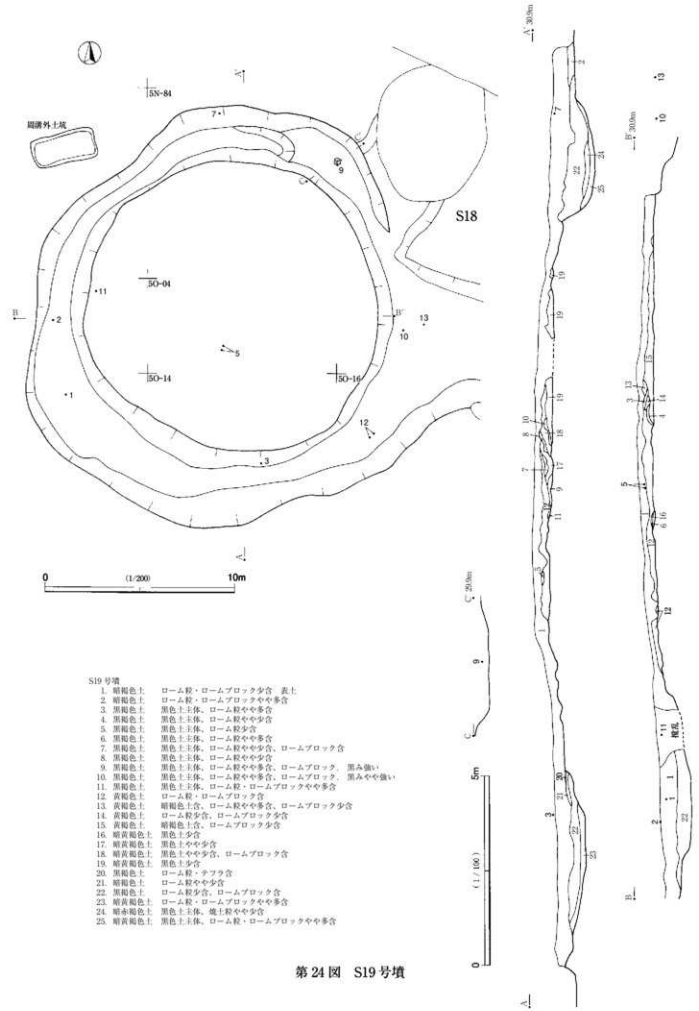
周溝は円形に廻り、北東側は S18 号墳と共有する。前述したように S18 号墳に前方部が付加された際、S19 号墳の周溝が埋まりきっていなかったため内壁を損壊することなく、重なる箇所は周溝を共有する形状としたものと思われる。周溝の直径は、内壁上端で 15.3 m～ 15.7 m、下端で約 17.0 mを測る。周溝の幅は上端で 1.65 m～ 4.5 mで、概ね 2.7 m～ 3.0 mほどであるが、南西側は広くなる。北西側は土坑を避けるように幅が狭くなっている。深さは内周上端から 0.5 m～ 0.9 mを測り、北側が深い。

墳丘・周溝内出土遺物（第 25 図、図版 10・11）

土器が 60 点ほど出土した。1～4 は土師器坏で、いずれも丸底である。1 はほぼ完形で、体部と口縁



第 23 図　S19 号墳墳丘図



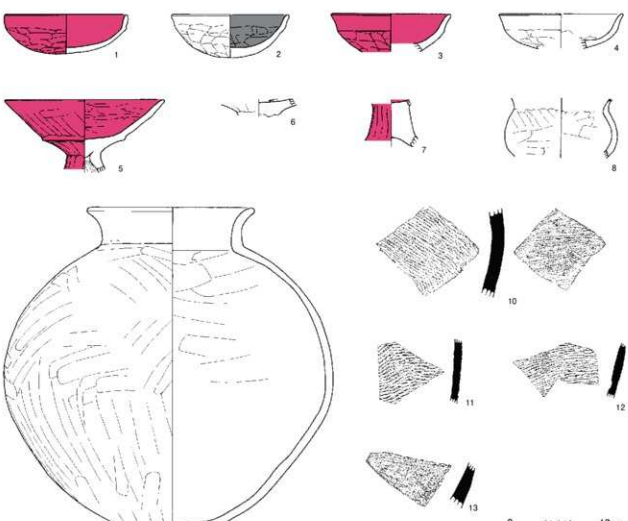
S19 号墳

1. 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少含　表土
2. 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多含
3. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや多含
4. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや少含
5. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒少含
6. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや多含
7. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや少含、ロームブロック含
8. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや少含
9. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや多含、ロームブロック、黒み強い
10. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒やや多含、ロームブロック、黒みやや強い
11. 黒褐色土　黒色土主体、ローム粒・ロームブロックやや多含
12. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロック含
13. 黄褐色土　暗褐色土含、ローム粒やや多含、ロームブロック少含
14. 黄褐色土　ローム粒少含、ロームブロック少含
15. 黄褐色土　暗褐色土含、ロームブロック少含
16. 暗黄褐色土　黒色土少含
17. 暗黄褐色土　黒色土やや少含
18. 暗黄褐色土　黒色土やや少含、ロームブロック含
19. 暗黄褐色土　黒色土少含
20. 黒褐色土　ローム粒・テフラ含
21. 暗褐色土　ローム粒やや少含
22. 黒褐色土　ローム粒少含、ロームブロック含
23. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多含
24. 暗赤褐色土　黒色土主体、焼土粒やや少含
25. 暗黄褐色土　黒色土主体、ローム粒・ロームブロックやや多含

第 24 図　S19 号墳

部の境界に稜を有し、口縁部はほぼ直立する。体部外面はヘラケズリ後ナデが施される。内外面に赤彩が施される。須恵器の蓋を模倣したものである。2は口縁部が小さく外反するもので、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。内面に黒色処理が施される。3・4は口縁部が外反するもので、体部外面にヘラケズリが施される。3は内外面に赤彩が施される。5～7は土師器高坏である。5は脚部を欠くもので、体部と口縁部の境界に段が形成され、口縁部が直線的に開くものである。脚部内面に粗いヘラナデが施される以外は、ヘラケズリ後丁寧なナデが施され、赤彩される。6は5と同形状の体部の破片である。7は脚柱部の破片で、脚部は小さく扁平に開くものと思われる。外面は縦方向のヘラケズリが施される。内外面とも赤彩される。8は土師器小型甕である。体部はやや下膨れである。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。9は球胴の土師器甕である。口縁部は胴部から直立し、中位から外反する。外面はヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。

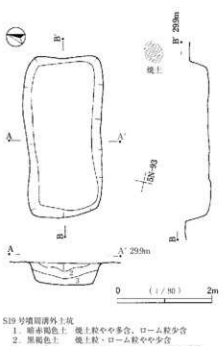
10～13は須恵器甕の破片である。10～12の外面は平行タタキが施される。13は格子状タタキが施された後ナデが加えられ、タタキは痕跡を残すのみである。内面はいずれもヘラナデが施される。10は灰色で胎土中に鉄分と思われる黒色粒を含む。湖西窯産である。13は1㎜～5㎜の石英粒、黒色粒を含む。



第25図　S19号墳出土遺物

周溝外土坑（第 26 図、図版 8）

S19 号墳の周溝外約 1.4 m北西側に位置する土坑（旧遺構番号 SK003）である。S19 号墳に関係ある埋葬施設の可能性がある。土坑主軸はN-78° -E を指す。長方形を呈し、開口部の長軸長 3.4 m、短軸長 1.68 m、深さ 0.5 mを測る。側壁は垂直ないし急角度で立ち上がり、底面は細かい凹凸があるが比較的平坦である。覆土に木棺等の痕跡は認められなかった。覆土上層には焼土が混じる。遺構外の 1 m北西側にも焼土の散布がみられた。遺物は出土しなかった。



第 26 図　S19 号墳周溝外土坑

第２表　古墳時代土器・埴輪一覧表

（　）は推定値　［　］は現存値

地点	遺構番号	掃図番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整外面	調整内面	底部切り離し	底外調整	備考
(13)	S07 号墳	第 13 図 1	須恵器	蓋	13.1	-	4.1	60%	灰	密	少	良好	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	ヨコナデ	-	-	外面自然釉
(13)	S07 号墳	第 13 図 2	土師器	壺	-	-	[4.0]	5%	橙	密	少	良好	ナデ	ナデ	-	-	
(13)	S07 号墳	第 13 図 3	土師器	壺	-	-	[4.0]	5%	にぶい赤褐	密	少	良好	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	-	-	
(13)	S07 号墳	第 13 図 4	円筒埴輪	-	-	-	-	5%	にぶい橙	密	少	良好	ハケ	ヘラケズリ	-	-	
(15)	S13 号墳	第 16 図 1	須恵器	甕	-	-	-	5%	灰オリーブ	密	少	良好	タタキ	ヘラナデ	-	-	
(16)	S15 号墳	第 17 図 1	土師器	坏	14.2	-	5.0	90%	にぶい赤褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	
(16)	S15 号墳	第 17 図 2	形象埴輪	-	-	-	-	5%	赤褐	密	少	良好	ハケ	ヘラケズリ	-	-	
(14)	S18 号墳	第 20 図 1	土師器	椀	(6.6)	-	[7.1]	70%	黒 明赤褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	内面黒色処理
(14)	S18 号墳	第 20 図 2	土師器	鉢	(10.0)	-	[6.2]	20%	黒 にぶい黄褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	-	-	
(14)	S18 号墳	第 20 図 3	須恵器	坏	-	(8.2)	[1.4]	15%	にぶい橙 にぶい黄橙	密	少	良好	ヨコナデ	ヨコナデ、手持ちヘラケズリ	ヘラ切り	全面手持ちヘラケズリ	
(14)	S18 号墳	第 20 図 4	須恵器	甕	-	-	-	5%	灰	密	少	良好	ナデ、ヘラナデ、タタキ、カキ目	当て具痕	-	-	
(14)	S18 号墳	第 20 図 5	須恵器	甕	(26.0)	-	[35.5]	40%	灰 オリーブ黒	密	少	良好	ヨコナデ、ヘラナデ、タタキ、カキ目	ヨコナデ、ナデ、当て具痕	-	-	外面自然釉
(14)	S18 号墳 主体部	第 21 図 1	須恵器	坏	(14.3)	(9.6)	4.3	25%	橙	密	少	良好	ヨコナデ、手持ちヘラケズリ	ナデ	ヘラ切り	全面手持ちヘラケズリ	
(14)	S18 号墳 主体部	第 21 図 2	須恵器	坏	(15.0)	(9.9)	4.2	35%	灰白 明褐灰	密	少	良好	ヨコナデ、手持ちヘラケズリ	ナデ	ヘラ切り	全面手持ちヘラケズリ	
(14)	S18 号墳 主体部	第 21 図 3	須恵器	長頸壺	(11.6)	8.8	24.5	90%	灰 灰オリーブ	密	少	良好	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラ切り	全面回転ヘラケズリ	
(14)	S18 号墳 主体部	第 21 図 4	須恵器	長頸壺	-	-	[13.2]	35%	灰オリーブ	密	少	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 1	土師器	坏	12.8	-	4.2	85%	橙	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	-	-	全面赤彩
(14)	S19 号墳	第 25 図 2	土師器	坏	(12.4)	-	4.6	30%	黒 にぶい褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	-	-	内面黒色処理
(14)	S19 号墳	第 25 図 3	土師器	坏	(12.6)	-	[4.0]	20%	赤褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	-	-	全面赤彩
(14)	S19 号墳	第 25 図 4	土師器	坏	(13.0)	-	[3.7]	20%	灰黄褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 5	土師器	高坏	16.8	-	[7.7]	55%	にぶい赤褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ	-	-	全面赤彩
(14)	S19 号墳	第 25 図 6	土師器	高坏	-	-	[1.9]	10%	明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 7	土師器	高坏	-	-	[5.0]	15%	赤褐 赤	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	全面赤彩
(14)	S19 号墳	第 25 図 8	土師器	小型甕	-	-	[6.3]	10%	にぶい褐	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 9	土師器	甕	17.2	(8.1)	34.7	60%	にぶい橙	密	少	良好	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 10	須恵器	甕	-	-	-	5%	灰	密	少	良好	タタキ	ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 11	須恵器	甕	-	-	-	5%	灰	密	少	良好	タタキ	ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 12	須恵器	甕	-	-	-	5%	灰	密	少	良好	タタキ	ヘラナデ	-	-	
(14)	S19 号墳	第 25 図 13	須恵器	甕	-	-	-	5%	灰	密	少	良好	タタキ	ヘラナデ	-	-	

第３表　臼玉一覧表

地点	遺構	掃図番号	種類	石材	色調	最大径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備　考
(13)	S07 号墳周溝内土坑 2	第 15 図　6	臼玉	滑石	灰白	7.5	4.2	2.0	0.47	軟質
(13)	S07 号墳周溝内土坑 2	第 15 図　7	臼玉	滑石	灰白	7.5	4.2	2.0	0.42	軟質
(13)	S07 号墳周溝内土坑 2	第 15 図　8	臼玉	滑石	灰白	7.2	4.1	2.1	0.43	軟質
(13)	S07 号墳周溝内土坑 2	第 15 図　9	臼玉	滑石	灰白	7.5	4.0	2.0	0.36	軟質
(13)	S07 号墳周溝内土坑 2	第 15 図 10	臼玉	滑石	灰白	7.0	4.0	2.0	0.38	軟質
(13)	S07 号墳周溝内土坑 2	第 15 図 11	臼玉	滑石	灰白	6.8	1.5	1.8	0.15	軟質

第4章　中・近世

第1節　溝状遺構

溝状遺構が4条検出された。いずれも既報告の溝と同一のものである。

1　022（旧遺構番号 SD001）（第27図、図版8）

既報告の（10）次調査地点の8Nグリッド付近で検出されており、（13）次調査において途中未調査地を挟んで東側に連続する溝が検出された。（13）次の東側調査地点の南側は、平成24年8月に四街道市教育委員会によって調査されており、第2号溝状遺構として連続部分が検出されている。直線的に伸びる溝で、方向はN-81°-Wを向き、検出された延長は約60 mである[1]。（13）次の西側調査地点では、上端幅0.5 m～0.6 m、深さ約0.6 mを測る。断面形は平坦な底面を有するV字状である。東側の調査地点は、幅0.3 m～0.4 m、深さ0.2 m前後を測る。四街道市調査地点では、溝状遺構023と同一の第1号溝状遺構と重複する。新旧関係は言及されていない。

遺物は出土しなかった。

2　023（第27図）

県道佐倉・千代田線の北側を並走する溝で、（13）次の東側調査地点で検出された。方向はN-63°-Eを向いている。東側に隣接して大規模な撹乱坑があり、産業廃棄物が埋められていたため掘り上げることを断念し平面確認に留めた。南西側は四街道市教育員会調査地点及び（4）次調査で検出され、それらの既報告分と併せると検出された延長は265 mである。上端幅約2.1 mを測る。四街道市教育員会調査地点では、断面形は底面に凹凸を有するV字状を呈し、深さ約0.5 mを測る。（4）次地点では溝底に柱穴列を有するが、やや不明瞭であった。

遺物は出土しなかった。

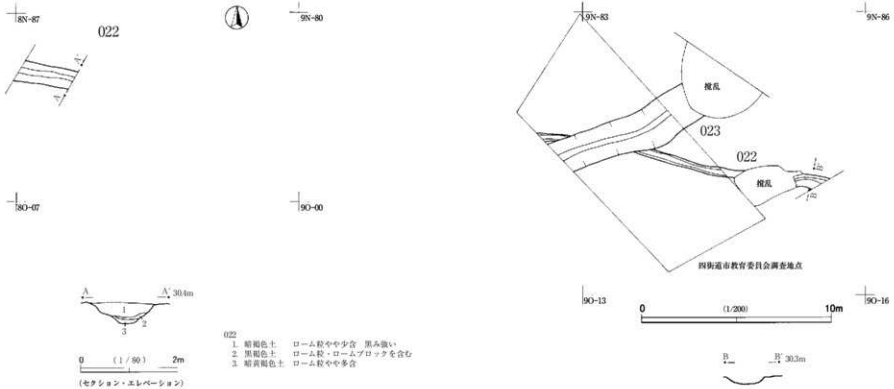
3　040（旧遺構番号 SD002）（第28図）

（15）次調査の5O-69、6O-60グリッド付近で検出された。未調査地を挟み西側は既報告部分に連続し、延長83 mである。S11号墳の南側にも同一とみられる溝状遺構がある。幅0.4 m～0.65 m、トレンチ調査部分の深さは0.23 mを測る。

遺物は、図示できなかったが須恵器の小破片が1点出土した。

4　043（旧遺構番号 SD001）（第28図、図版8）

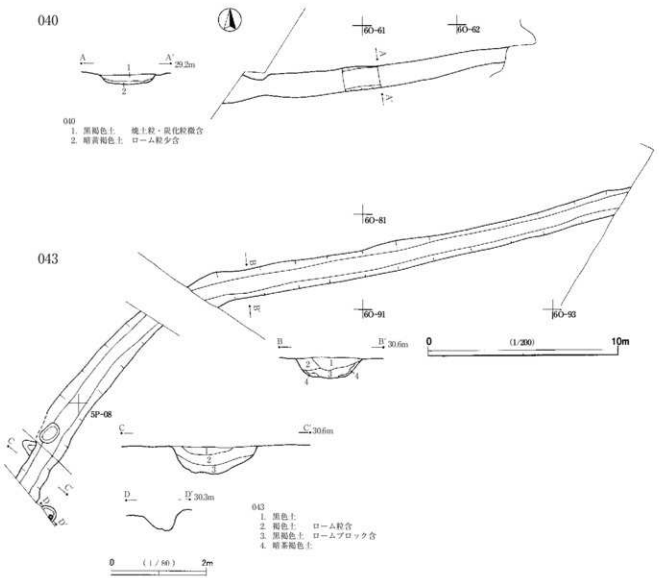
（4）次調査の既報告部分を挟み、（15）次調査の5O-89、6O-81グリッド付近（旧遺構番号SD001）及び、（16）次調査の5P-17グリッド付近で検出された。S15号墳の北側で約35°南側に屈折し、延長37.5 mである。幅1.2 m～1.6 m、深さ0.5 m～0.6 mを測る。（4）次調査部分の溝底、（16）次調査部分の南側には小規模な土坑・ピットが掘られている。表土層近くから掘り込まれており、撹乱と判断される。西側に位置するS16号墳の南側の039、東側のS11号墳の南側の溝状遺構も一続きとみられる。


8N-87
9N-80
022
8O-07
9O-00
A
A' 30.4m
1
2
3
0 (1/80) 2m
(セクション・エレベーション)
022
1. 暗褐色土 ローム粒やや少含 黒み強い
2. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む
3. 暗黄褐色土 ローム粒やや多含
9N-83
9N-86
撹乱
023
022
撹乱
四街道市教育委員会調査地点
9O-13
9O-16
0 (1/200) 10m
B
B' 30.3m

第 27 図 022・023

遺物は、図示できなかったが古墳時代の土師器、時期不明の鉄製品などが出土した。

注1　四街道市教育委員会　2013「平成24年度四街道市内遺跡発掘調査報告書」



第28図　040・043

第5章　まとめ

第1節　各古墳の概要

物井古墳群が分布する清水、新久、出口、出口・鐘塚遺跡については、平成22年度までに主だった地点の調査が終了し、合計37基の古墳の墳形、規模、主体部、副葬品の特徴が総括された。詳しくは既刊の報告書を参照されたいが、本節では、今回の報告によって明らかとなった新たな知見について指摘しておきたい。

今回報告した5基の古墳のうち、S07・S13・S15号墳は既報告の古墳の未調査部分、S18号墳は存在が予想された古墳、S19号墳は新発見であり、清水遺跡における既調査の古墳の総数は19基となった。

S07号墳は、円墳（Ⅴ類）、墳丘規格はBランクで変更はない[1]。主体部は今回の調査でも見つかっておらず墳丘封土内に設置されたと推測される。周溝内土坑は1基追加となり合計2基となった。長方形の墓坑で、木棺が安置されたものである。掘方の規模は主体部と遜色なく、掘り込みも丁寧である。副葬品の出土位置及び粘土の散布状況から、埋葬された遺骸は単体と判断される。

副葬品は、鉄刀、刀子、鉄鏃、滑石製臼玉が出土している。鉄刀（第15図1）は背側に浅い撫角の二段関をもち、茎胴部は細茎に分類される。物井古墳群ではこれまで検出されていないものである。二段関をもつ刀の出土例をみると、千葉県内では多古町多古台№3-6号墳[2]、市原市東間部多1号墳[3]から茎胴部が中細茎の大刀が出土している。いずれも中期後葉（5世紀中葉～後葉）の円墳である。胴部が細茎、茎尻が隅抉りの大刀は県外において数例出土しており、伴出した須恵器は陶邑編年のTK10～TK43型式（6世紀中葉～後葉）に位置づけられる。一般に片関系列の鉄刀の茎胴部の形状は、5世紀代は中細茎→6世紀代は先細茎・細茎という変遷が時期決定の指標となる[4]。

鉄鏃（第15図3～5）は3点錆着し、全体の形状が分かるものはないが、いずれも片刃の長頸鏃とみられる。頸部には棘状に突起する関部がみられる。棘関はTK43型式期（6世紀後葉）以降に現れ、古墳時代の終末まで継続するものである[5]。

滑石製臼玉（第15図6～11）は、軟質で灰白色を呈し、側面は平滑に仕上げられているが、上下面は凹凸があり調整が省略されている。厚さ1.5mmと薄手のものも1点出土している。古墳時代中期編年のⅣ期[6]（5世紀後半）以降の所産と判断される。滑石製品は古墳時代中期に盛行し、後期には有力古墳への副葬はなくなり中小古墳のみになり、その副葬形式は臼玉が大多数を占め[7]、後期中葉（TK43型式期）には衰退に向かう[8]。千葉県内では、臼玉は古墳時代後期にまとまった出土例が少なく、これまで物井古墳群において出土した玉類は、ガラス製の小玉、水晶の切子玉などが主であることから、古い様相をもつ遺物と評価しかねない。しかし、物井古墳群の造営主体集落の一つと目される館ノ山遺跡では滑石製有孔円板・剣形などが7世紀初・前葉まで出土し、臼玉は小沢洋氏の編年[9]の3期～4期（TK10～TK43型式併行）の竪穴住居跡SI-109、SI-121、SI-145などからS07号墳と同巧のものが出土していることから、鉄刀、鉄鏃などとそれほど変わらない時期の所産とみるべきであろう。

以上から、周溝内土坑2から出土した副葬品は、TK10～TK43型式期（6世紀中葉～後葉）の時期幅が認められる。鉄鏃が属人的な伝世の可能性が低いことを考慮すると、埋葬時期はTK43型式期に捉えられよう。

周溝内から出土した土器は、須恵器蓋（第13図1）はMT85型式、前回報告の栗囲式に似た口縁部が大きく開く土師器坏は、小沢氏の3期（TK10型式併行）の所産であることから、周溝内土坑2の埋葬時期より古く、古墳の築造時期は、既報告で想定されたように群中でも早い6世紀中葉以前に遡ると考えられる。

S13号墳は、今回の調査で規模が確定した（直径13.1m、Dランク）。既報告では円墳と推測されたが、周溝が西・南の2か所で途切れていた。後述するS15号墳のように、いずれか1か所が途切れる陸橋部をもつ円墳である可能性が高い。主体部は今回の調査でも検出されなかった。

S15号墳は、既報告でDランクの円墳（V類）と推測されたが、周溝が1か所途切れる陸橋部をもち、途切れた箇所の周溝内壁延長線に墳裾部が検出され、墳形は円墳であることが明らかとなった。出土土器は、須恵器椀はMT85型式、土師器坏は小沢氏の3期に当たり、6世紀中葉の所産である。

群の東側で隣接して位置するS13・S15号墳は、ともに陸橋部をもつDランクの小規模な円墳で、主体部は検出されず、墳丘封土内への設置が推測される。既存の墳形の類型には当てはまらないものである。Dランクの古墳は墳形が不明確なものが多く、確定されたのは上記の2基と、木棺を左側の墳裾に設けたA02号墳1基のみである。円墳（V類）と確定されたものはないことが注意される。陸橋部付きの円墳は、4世紀代に現れ、東北北部以北、九州南部を除いて分布する。墳丘径10m～20mの小規模なものが主体であり、S13・S15号墳の周溝のように途切れた先端の平面形が先細りであるのは、5世紀末～6世紀前葉に盛行する形態であるとされる[10]。

S18号墳は、物井1（S11）号墳の報告書において物井2号墳の名称が与えられた古墳である。群の北西端近くに位置する。前回の報告時には民家が建っていたため詳細が不明であったが、平成25年度に発掘調査され、存在が確かめられたものである。今回の調査によって、突出部を付加し、前方後円墳に改変されていることが判明した。改変前の墳形は円墳（V類）である可能性が高い。

主丘部の規模は推定約25mでAランク、付加された前方部は突出部が比較的大きい前方後円墳に近いプランをもつI類で、物井古墳群で最大規模の前方後円墳であるS16号墳と同等の全長約33.5mを測る。I類の古墳は群の西端（S16号墳、Aランク）と南端（D05号墳、Bランク）に次いで3基目である。

調査区際の南東側の撹乱坑から土器・鉄製品、南東側の周溝内から盗掘の際に抜き取られたとみられる雲母片岩の石棺材・鞍金具が出土しており、主たる埋葬施設は箱式石棺で、撹乱坑の北側の調査区外に位置しているとみられる。

土器は、新治窯産の須恵器坏（第20図3）、南側に位置する主体部出土の新治窯産の須恵器坏（第21図1）及び湖西窯産の長頸壺（第21図3）と接合する破片が出土した。坏はいずれもかえりをもつ蓋に対応する。長頸壺は鈴木敏則氏による遠江の須恵器編年のV期前葉[11]のもので、いずれも7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

鉄鏃（第20図6）は、鏃身が幅広い三角形で、頸部関は直角である。7世紀中葉以降の所産と捉えられる[12]。周溝内から出土した鞍金具は、輪金は剳金が省略され左右に張り出す形状であること、脚は不均等にからめて一方向に曲げられていること、座金具が板状形であることから、宮代栄一氏による編年のV期（TK43型式併行）[13]に比定される。馬具は、鉸具造り立聞頸環状鏡板、鋲頭に銀貼りの施された蛇尾金具・方形留め金具が出土したA04号墳（Ⅱ類、Bランク）に次いで2例目である。鏡板は岡安光彦氏による編年の第V段階（TK217型式併行）[14]に相当するものである。

周溝から出土した土師器椀（第20図1）・鉢（第20図2）は、小沢氏の5期・6期（TK209～TK217型式併行）に当たるものである。湖西窯産の須恵器甕（第20図5）は、短い頸部、断面矩形の折り返し状の口縁、胴部のタタキ後のカキ目調整に特徴がある。A04号墳の主体部から、小型であるが同じ作りの須恵器甕と鉢が出土している。湖西市西笠子第64号窯跡出土品[15]に類例があり、遠江編年のⅢ期中葉（TK43型式併行、6世紀後葉）に位置づけられる。

前方部に設けられた主体部は、小規模で副次的なものである。出土した須恵器から7世紀末～8世紀初頭に営まれたものである。

以上S18号墳からは、6世紀後葉～8世紀初頭までの長期間にわたる遺物が出土しており、6世紀後葉に築造され、7世紀のある時期に前方後円墳に改変され、8世紀初頭まで追葬が行われた。物井古墳群において最も新しい時期まで営まれた古墳と捉えることができよう。

円墳から前方後円墳への改変例については、物井古墳群をはじめ、近隣の千代田、御山、池花などの古墳群では今のところ見つかっていない。管見によれば、市原市諏訪台古墳群では4基検出されており、S18号墳と同時期の6世紀後葉に円墳として成立し、7世紀中葉末～末葉にかけて前方後円墳に改変されたものである[16]。

S19号墳は、S18号墳の南西側に隣接する新発見の円墳である。周溝が全周するV類、墳丘規模は直径17mでCランクである。S18号墳と一部周溝を共有する。主体部・周溝内土坑は検出されず、北西側の周溝外に土坑（墓）が検出された。変則的古墳に先行する早い時期に造営された円墳で、周溝内から出土した供献土器は小沢氏の4期（MT85～TK43型式併行）に位置づけられるものである。

以上、5基の古墳の新知見により、以前総括された物井古墳群全体の一覧表について、墳形の判定・主体部・副葬品などに一部変更・追加する必要が生じたが、平成25年度に出口遺跡において調査された古墳2基の報告が未了であることから、全体の修正はその報告の際に行うこととし、今回は清水遺跡において調査された古墳のみを第4表に示す。

第2節　物井古墳群の始まりと終焉の時期について

従来、物井古墳群の造墓時期は、TK43～TK209型式期、遠江の須恵器編年のⅢ期後半を中心に、その前後頃の6世紀後葉～7世紀前葉で、その後しばらく追葬や追善祭祀が行われたと考えられてきた。今回の報告は5基の古墳の調査成果であったが、はからずも物井古墳群の始まりと終焉の時期とその様相を知ることができる資料を得ることができた。

前回の報告において、主体部が墳裾部になく、墳丘封土内への設置が推測されるV類の円墳S07・S08・S15号墳などは、変則的古墳より早く営まれたと考えられた。S07号墳は今回の報告で6世紀中葉（TK10型式併行期）以前に造営されたことが示唆された。東側に隣接する唯一埴輪が樹立されたS08号墳（Aランク）、新発見のS19号墳、D01号墳（Cランク）、DK01号墳（Bランク）も相前後して築造されたものであろう。

S15号墳は小型の陸橋部をもつ円墳であることが判明したが、主体部は墳丘封土内への設置が推測され、上記の円墳と同じ早い時期に造営されたもので、S13号墳とともに陸橋部の反対側に主体部をもつⅣ類に先行する新たな類型となる可能性がある。

物井古墳群の終焉の時期については、S18号墳（V?→I類）の出土遺物により8世紀初頭の古墳時代

終末期まで下ることが明らかとなった。Ⅰ類の前方後円墳は地域における最高首長墳であり、7世紀前葉のD05号墳→7世紀前葉から中葉にかけて営まれたS16号墳→改変後のS18号墳に変遷すると考えられる。

注1　物井古墳群では既報告等において、墳形は、比較的大きい突出部をもつ前方後円墳（Ⅰ類）、短い突出部をもつ帆立貝古墳（Ⅱ類）、陸橋部をもち、主体部が陸橋部に設置される帆立貝古墳に準じる墳形（Ⅲ類）、陸橋部をもち、主体部が陸橋部の反対側に設置される円墳（Ⅳ類）、単純円墳（Ⅴ類）の5種類、墳丘規格は、主丘部直径がA：18歩（24.7m）、B：15歩（20.6m）、C：12歩（16.4m）、D：9歩（12.3m）の5ランクに分類されている。詳細は以下を参照されたい。

（財）千葉県教育振興財団　2009『四街道市清水遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』

沼澤　豊　2010「中小古墳における形態と規模の企画性」『研究連絡誌』第71号　（財）千葉県教育振興財団

（財）千葉県教育振興財団　2011『四街道市新久遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』

（財）千葉県教育振興財団　2012『四街道市出口遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』

2　（財）香取郡市文化財センター　2002『多古台遺跡群Ⅱ－№3地点の調査－』

3　上総国分寺台遺跡調査団編　1974『東間部多古境群－上総国分寺台遺跡報告Ⅰ－』早稲田大学出版部

4　白井　勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

5　杉山秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八　吉川弘文館

6　（公財）千葉県教育振興財団　2012『研究紀要』27

7　深澤敦仁　2005「原石の流通と玉作（関東）－群馬県地域の様相に基づく仮説モデルの提示」『古墳時代の滑石製品－その生産と消費』埋蔵文化財研究会

8　大賀克彦　2013「玉類」『古墳時代の考古学4　副葬品の型式と編年』同成社

9　小沢　洋　1995「房総の古墳後期土器－坏の変遷を中心として－」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会

10　白井久美子　2002「小規模円墳の被葬者像－ブリッジ付き円墳の検討－」『千葉大学考古学研究叢書2　古墳から見た河島東縁世界の形成』平電子印刷所

11　鈴木敏則　2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅－猿投窯・湖西窯編年の再構築第5分冊　補遺・論考編』東海土器研究会

12　関　義則　「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号　古墳文化研究会

13　宮代栄一　1996『古墳時代金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－』『日本考古学』第3号　日本考古学協会

14　岡安光彦　1984「いわゆる「素環の轡」について－環状鏡板付轡の型式学的研究」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

15　湖西市教育委員会　1987『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』

16　市原市教育委員会　2015『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ』

第４表　物井古墳群（清水遺跡内）古墳一覧表

番号	遺構番号	旧遺構番号	別　名	調査年度	墳形	直径	主体部	副葬品	その他の遺物	備　考
1	S01	001		1985 ～ 86	Ⅲ	B	木　棺 周溝外壁土坑	刀子、鉄鏃	土師壺片	
2	S02	002		1985 ～ 86	Ⅱ	A	箱式石棺 周溝内土坑	鍔、耳環、勾玉、丸玉、ガラス玉 直刀、刀子、鉄鏃、棗玉	土師坏	
3	S03	003		1985 ～ 86	Ⅱ	B	箱式石棺	ガラス玉	鉄斧	周溝未掘部あり
4	S04	004		1985 ～ 86	Ⅱ	B	箱式石棺 周溝内土坑	刀子、鉄鏃、臼玉、ガラス玉 直刀	須恵平瓶、土師坏	周溝未掘部あり
5	S05	005		1985 ～ 86	Ⅳ	C	箱式石棺	直刀、鉄鏃、勾玉、ガラス玉	手づくね、土師椀片	周溝未掘部あり
6	S06	206		2008	Ⅲ	B	木　棺１ 木　棺２ 周溝外壁土坑	直刀、鉄鏃、耳環 耳環		周溝未掘部あり
7	**S07**	**025**		**1998 2005 2012**	**Ⅴ**	**B**	**周溝内土坑１ 周溝内土坑２**	**刀、刀子、鉄鏃、臼玉**	**刀子、鉄鏃片、須恵蓋、土師坏**	**周溝未掘部あり**
8	S08	021		1998	Ⅴ	A	－		埴輪、鍔、鉄鏃、須恵・土師多数	
9	S09	026	物井３号墳	1998	Ⅱ	－	－		石棺材片、土師坏・手づくね多数	突出部の一部のみ発掘
10	S10	030		1998	?	C	－			周溝１/４周ほど発掘
11	S11	134	物井１号墳	1981 1999	Ⅳ?	A	箱式石棺 周溝外壁土坑	直刀、円頭把頭、鉄鏃、棗玉	人骨、土師椀	1981 年調査は四街道市教育委員会による
12	S12	135		1999	Ⅳ	C	箱式石棺	直刀、刀子、鉄鏃	人骨、土師坏・甕	周溝が一部途切れる
13	**S13**	**136**		**1999 2012 2013**	**?**	**D**	**－**		**須恵甕**	**周溝が一部途切れる**
14	S14	037		1998	Ⅴ?	D	－			周溝１/２周弱を発掘
15	**S15**	**036**		**1998 2014**	**?**	**D**	**－**		**不明鉄製品、土師坏**	**周溝が一部途切れる**
16	S16	035		1998	Ⅰ	A	箱式石棺 周溝外壁土坑	直刀、刀子、鉄鏃、切子玉、臼玉、ガラス玉、双孔円盤	須恵・土師多数	
17	S17	200		2005	?	－	－			周溝の一部を発掘
18	**S18**	**SM002**	**物井２号墳**	**2012**	**Ⅴ?→Ⅰ**	**A**	**箱式石棺? 木棺 周溝内土坑 周溝内壁土坑 周溝外壁土坑１ 周溝外壁土坑２**		**鉄鏃、鞍金具、石棺材、須恵坏・須恵長頸壺・須恵壺・土師椀・鉢**	**円墳？から前方後円墳に改変、前方部・後円部の一部を発掘**
19	**S19**	**SM001**		**2012**	**Ⅴ**	**C**			**土師坏・高坏・甕、須恵甕**	**周溝外に土坑（墓）**

＊ゴシックは今回報告の古墳

＊＊旧遺構番号：発掘調査時の遺構番号

＊＊＊別名：「物井一号墳発掘調査報告書」（1982年・四街道市教育委員会）による名称

＊＊＊＊主丘部直径のランク　A：18歩(24.7m)　B：15歩(20.6m)　C：12歩(16.4m)　D：9歩(12.3m)

＊＊＊＊＊墳形　Ⅰ：前方後円墳　Ⅱ：帆立貝古墳　Ⅲ：Ⅱに準ずる墳形　Ⅳ：ブリッジをもつ円墳　Ⅴ：円墳

写　真　図　版

清水遺跡周辺航空写真（約1/10,000 昭和44年撮影）

図版 2

S07 号墳周溝南西側（西から）

S07 号墳周溝南西側（南東から）

S07 号墳周溝南東側（東から）

S07 号墳周溝内土坑 2（西から）

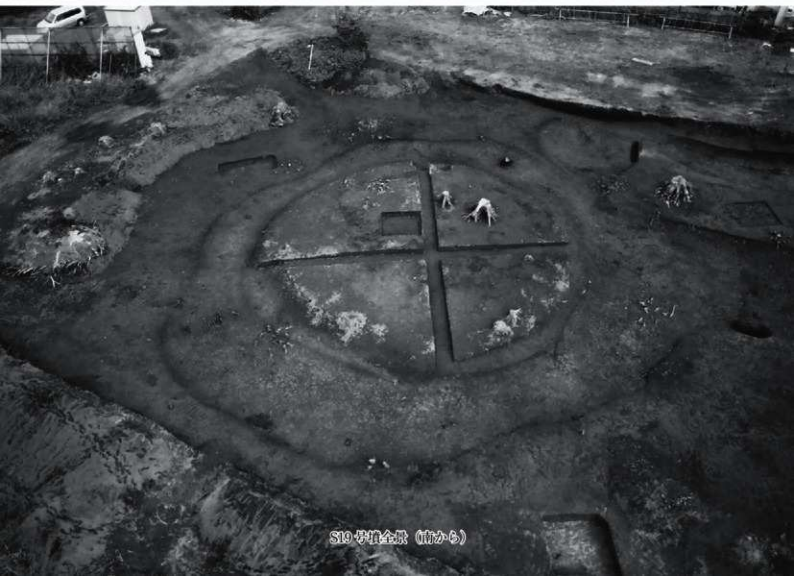
S07 号墳周溝内土坑 2 遺物出土状況（西から）

S07 号墳周溝内土坑 2 遺物出土状況（西から）

S13 号墳周溝北西側（南西から）

S13 号墳周溝南西側（西から）

S18号墳・S19号墳遠景（北東から）



S19号墳全景（南から）

図版 4

S18 号墳改変前周溝（北西から）

S18 号墳改変前周溝・落掘坑（東から）

S18 号墳改変前周溝（西から）

S18 号墳前方部（南東から）

S18 号墳前方部（南西から）

S18 号墳周溝西側（南西から）

S18 号墳周溝東側遺物・石材出土状況（南東から）

S18 号墳周溝南側遺物出土状況（南から）

S18 号墳周溝南側須恵器甕出土状況（南西から）

S18 号墳盗掘坑土層断面（東から）

S18 号墳盗掘坑遺物出土状況（南から）

図版 6

S18 号墳主体部完掘状況（南から）

S18 号墳主体部木棺埋土検出状況（南から）

S18 号墳主体部棺床検出状況（北から）

S18 号墳主体部遺物出土状況（東から）

S18 号墳主体部遺物出土状況（西から）

S18 号墳周溝内壁土坑（南西から）

S18 号墳周溝内土坑（南から）

S18 号墳周溝外壁土坑 1（西から）

S18 号墳周溝外堤土坑2（東から）

S19 号墳調査前風景（南西から）

S19 号墳墳丘土層断面（南東から）

S19 号墳墳丘西側土層断面（南から）

S19 号墳墳丘北側土層断面（東から）

S19 号墳周溝北側土層断面（東から）

S19 号墳完掘状況（南から）

S19 号墳完掘状況（北西から）

図版 8

S19 号墳周溝北東隅土師器甕出土状況（南から）

S19 号墳周溝南西隅土師器甕出土状況（北東から）

S19 号墳周溝外土坑（北東から）

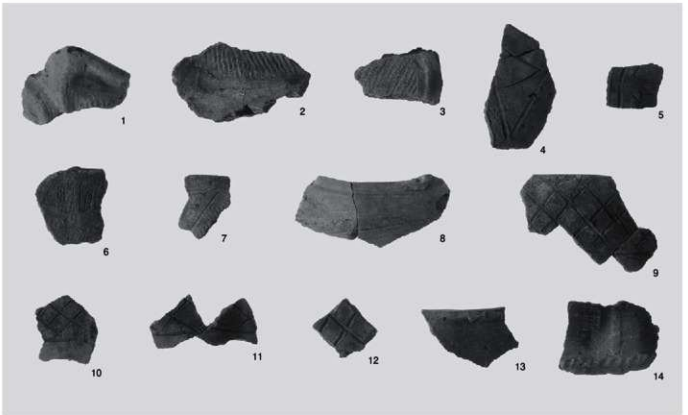
S15 号墳周溝西側（南東から）

022 西側（東から）

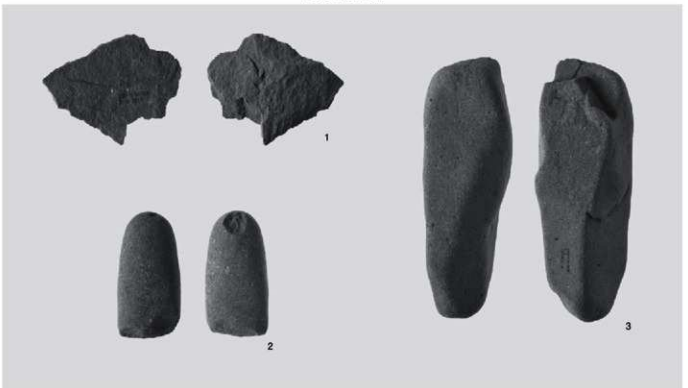
022 東側（西から）

043 東側（東から）

043 西側（南西から）



縄文時代土器



縄文時代石器

S07号墳-1

S15号墳-1

S18号墳-1

S18号墳-5

S18号墳主体部-1

S18号墳主体部-2

S18号墳主体部-3

S18号墳主体部-4

S19号墳-9

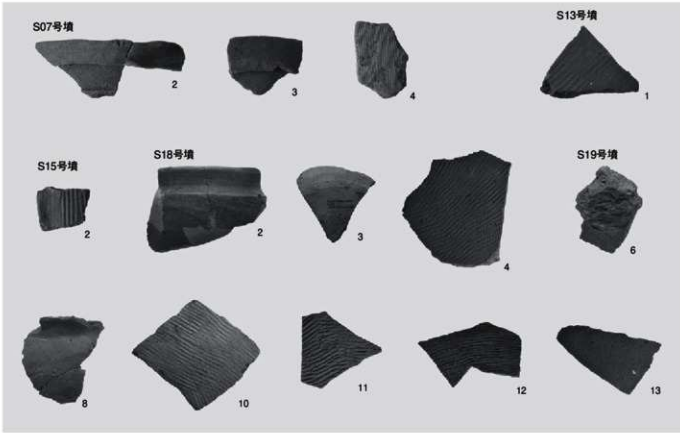
S19号墳-1

S19号墳-2

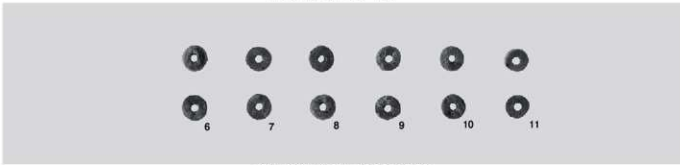
S19号墳-5

S19号墳-7

古墳時代土器(1)

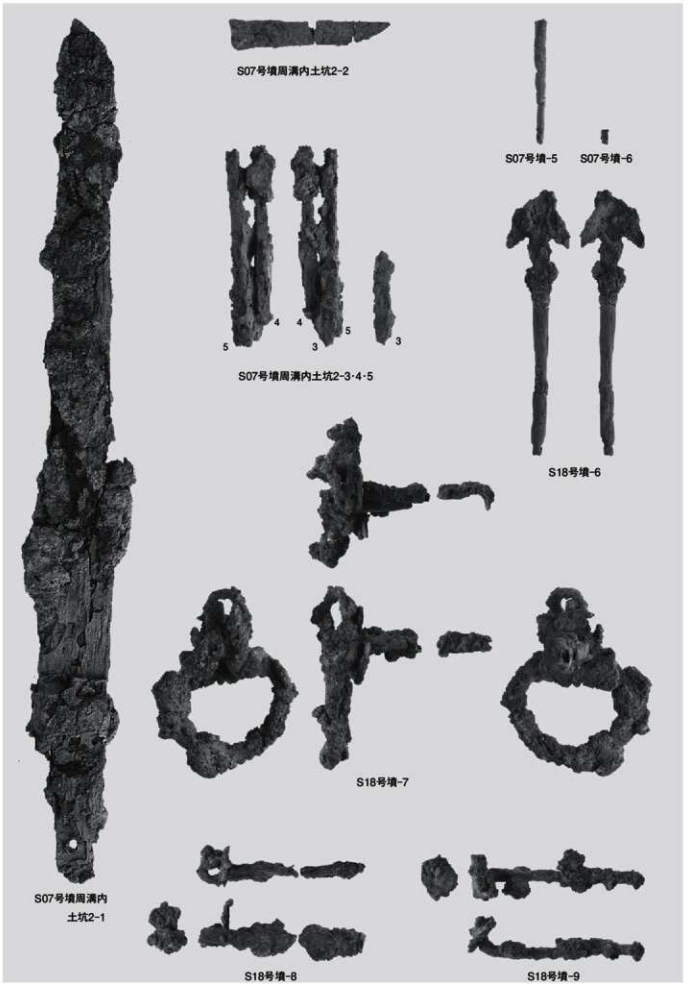


古墳時代土器(2)・埴輪

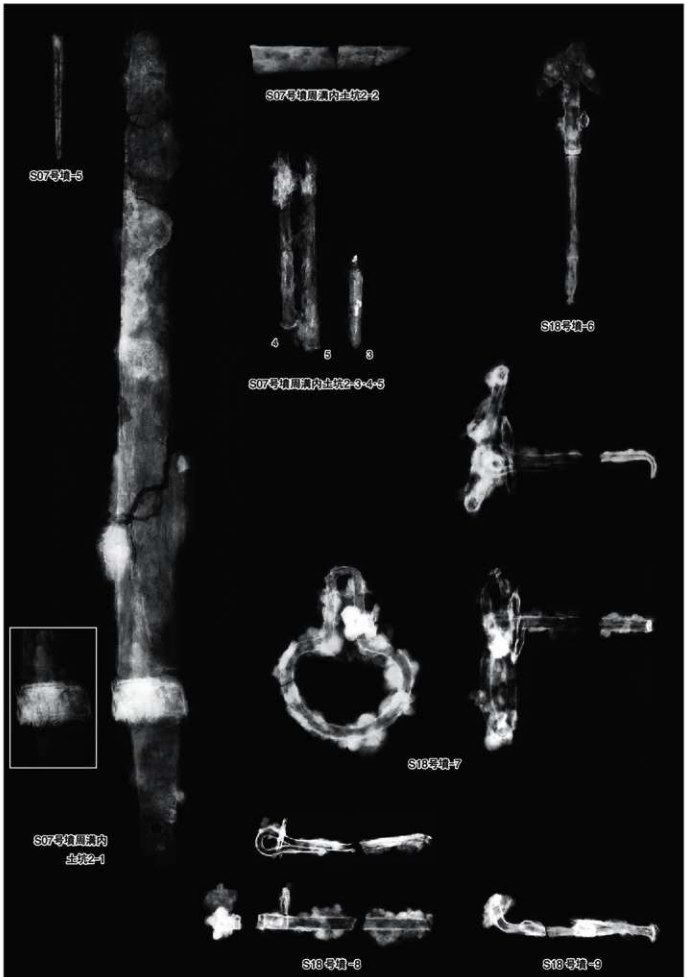


S07号墳周溝内土坑2出土臼玉

S18号墳出土石棺材


S07号墳周溝内土坑2-2
S07号墳-5
S07号墳-6
5
4
4
5
3
3
S07号墳周溝内土坑2-3·4·5
S18号墳-6
S18号墳-7
S07号墳周溝内
土坑2-1
S18号墳-8
S18号墳-9

鉄製品



鉄製品エックス線透過写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	よつかいどうししみずいせき（3）
書名	四街道市清水遺跡（3）
副書名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XIX
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第745集
編著者名	糸川道行・木原高弘
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　TEL.043-424-4848
発行年月日	西暦 2016年 2月 26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
清水遺跡（しみずいせき）	四街道市物井字清水1445-9（よつかいどうしものいあざしみず） ほか	228	006	35度 41分 14秒	140度 11分 05秒	20120703～ 20120820 20120709～ 20121019 20130719～ 20130809 20140922～ 20141016	172㎡ 1,774㎡ 579㎡ 120㎡	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水遺跡	古墳	古墳時代	円墳4基、前方後円墳1基、土坑（墓）1基	鉄刀、刀子、鉄鏃、鞍金具、臼玉、須恵器、土師器	前方後円墳は円墳等から改変されたものである。
	包蔵地	縄文時代		縄文時代土器、石器	
		中・近世	溝状遺構4条		

要約

清水遺跡は鹿島川水系と手繰川水系の分水界となる台地上に立地し、40基の後期古墳が分布する物井古墳群の北西側に位置する。本書では、3基は既報告の古墳の未調査部分、2基は新規に調査された古墳の報告を行った。

4基の円墳はいずれも墳丘地山内に主体部が設けられておらず、削平された墳丘封土内に主体部を設置していたものと思われる。墳丘裾部に主体部が設置される変則的古墳に先行し、6世紀中葉～後葉頃に築造されたものである。墳形は、2基は円墳、2基は周溝に陸橋部をもつ小型の円墳であった。円墳のうち1基の周溝内からは埋葬施設が検出され、鉄刀、鉄鏃、刀子、滑石製臼玉が出土した。

かつて物井2号墳と命名された1基は円墳等に突出部を付加し、物井古墳群で最大規模の前方後円墳に改変されていたことが明らかとなった。主たる埋葬施設は雲母片岩を使用した箱形石棺が調査区外に位置すると推測され、ほかに前方部に木棺直葬の主体部が1基、周溝内に副次的な埋葬施設が設けられていた。6世紀後葉～8世紀初頭の遺物が出土し、7世紀前葉～中葉かけて営まれた2基の前方後円墳に続く、最も新しい時期まで営まれた地域の首長墳と捉えられる。

千葉県教育振興財団調査報告第 745 集

四街道市清水遺跡（3）

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ－

平成 28 年 2 月 26 日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　行　独立行政法人　都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6－5－1

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印　刷　株式会社　エリート情報社[印刷出版局]
成田市東和田 415－10